

# 授業構想

——「三」（斎藤隆介・作）——

廣田 隆志

はじめに

日本国語教育学会岐阜県支部では毎年、夏季（八月）に土岐市の会場で研修会を、冬季（一月）に本学を会場にしての研究大会を実施してきた。しかし、平成十八年度と十九年度の冬季は、会場を本学の附属小学校で公開授業、講演、実践発表を行った。このうち、平成十八年度の公開授業の授業者は西田拓郎先生（現・関市立旭ヶ丘中学校）であり、十九年度は私であった。私の授業では五年生の子供たち十二人に対し、斎藤隆介・作「三」の冒頭の部分の読みを行った。子供たちの真摯で意欲的な学習態度は見事なものであり、日頃の附属小学校の先生方の指導力の高さを物語るものであった。

この授業で私が意図したことは三点ある。

一点目は、「教師の發問から始まる授業ではなく、子供の読みを優先した授業」であり、私の授業スタイルである。若年の頃参加した作文研究会で、作品処理の問題が出たことがある。作文の評をたくさん書いてやりたいし、さりとてたくさん書こうとすると作品の処理がなかなか進まないというのである。その時指導者だった高名な野村芳兵衛先生は、「その作文のいいところが多くあっても、全部評に書く必要はない。その中の一つを取り出し、ほめてやればよい。また、もっとこういう点に注意し、努力するとよくなるということが多くあっても、全部評に書かなくてもよい。その中の一つだけを与えてやればよい。取り出すこと一つ、与えること一つ、これをくり返せば子供の意欲や力も伸びるし、先生の負担も少なくて済む。」と指導されたのである。野村先生は「一つ取り出し、一つ与える」ということを、作文処理の際の評の書き方にについて言われたのであった。

のであるが、このことは教育のいろいろな場で使える考え方である。

まず「取り出し」が先にあって、「与える」が後にあることについてであるが、取り出すためには子供たちの活動がなければならない。まず子供たちが、話したり書いたり活動したりする。それを先生が、注意深く見たり聞いたりして位置づける。出来たところを認め励ましてやるわけである。それをやっておいてから、不十分なところや足りないところを先生の方から補い与える。授業の大本は、この順序で仕組まねばならないと考える。

次に、「取り出し」も「与える」も、両方とも授業には必要であるということである。「教えるべきことは、きちんと教える」ということがよく言われるが、必要なことは先生がきちんと「与える」ことが大切である。

これらのことから、授業では子供が話すことから始める。私が課題を提示したり発問したりしないで、子供が自分で発見し自分から話すように仕向けていたのである。こういう姿勢や構えが、学習指導要領の「自ら学び自ら考える」態度と力の育成につながるのである。

二点目は、ことばや表現の仕方に目を向けさせる授業である。物語文の授業というと登場人物の「気持ち」を読み取らせよしとする授業が多く見られる。国語の学習は、ことばの学習、言語の学

習である。もっとことばや表現の仕方に目を向けさせる必要がある。そうでないと語彙の獲得や表現の工夫、さらには言語感覚——言語の使い方の正誤・適否・美醜などについての鋭い感覚——が身についていかない。そのために、表現の仕方に特異性の見られる斎藤隆介の作品を選んだのである。

三点目は、「想像する」(イメージ化)活動を取り入れた授業である。映像文化によって、子供たちがことばから想像する力が弱いと指摘されて久しい。然るに、多くの授業ではことば指示の発問に終始し想像させる活動に乏しい。従って、授業では「どんな人物が想像できるか」「ウォーキと叫ぶのはどんな時だと想像するか」など想像させる活動を取り入れる。

このような意図で授業を行ったわけであるが、作品の冒頭だけの授業であったので、「三。」の全授業構想について、述べることにする。

### 一 「三。」(斎藤隆介・作)の全文

私の取り上げた「三。」は、福音館書店の絵本版である。ページ

はつけられないが、つけてみると二十三ページにわたっている。

斎藤隆介には、他に次のような作品がある。「モチモチの木」「「ノ字鬼」「もんがく」「浪兵衛」「五郎助奉公」「八郎」「ベロ出しチヨ

ンマ」「花咲き山」「ソメコとオニ」「死神どんぶら」「毎日正月」

「寒い母」「天の笛」「緑の馬」などである。このうち、「モチモチ

の木」は光村図書・三年、「ソメコとオニ」は教育出版三年に教科書教材として掲載されている。なお、「三。」は六年を対象と考えている。以下「三。」の全文であるが、漢字にはすべて振り仮名がつけられているが省略する。

三。は秋田の平野の子だ。

いつごろ生まれたのか、だれも知らない。ずっとむかしから生きていた。

オイダラ村あたりの、水のみ百姓の小セガレだったことはたしかだ。三吉か三太か、ほんとうの名前さえチャントでなく、三。と半ばにしか呼んでもらえないのが何よりのしようこだ。

そいつがいつのころからか、秋田の平野を風にのってかけはじめた。

五里——十里——二十里——。

それから、せいがデッカクなりはじめたらしい。

ちいさな村の、ちいさな土地にしばりつけられて、四つばかりになつてくらすことには、しんぼうならなくなつたんだろう。からだがそだつたのは、魂がそだつたからだろう。

——とにかく、三。は風にのつて、秋田じゅうをかけまわりはじめた。

五月の青葉の風のなかで、十一月のものすごい吹雪のつむじ風のなかで、

「ウォーウォーイ」

とさけぶ三。の声をきいたというものが、何人もでてきた。

何百年ものあいだに何人かだから、三。の声をきいたものはわざかだが、たしかにきいたものがあるのだから、三。は生きているにちがいないといわれた。

けれども、すぐたを見たものは、だれもいない。

「寒風山から吹きおろす北風のせんとうに立つて、山のような大男が、ワッシ、ワッシと走つて見た。」

なんぞというじいさん百姓もいたが、これはあんまり北風がさむいのに着物がうすいから、さむさのまぎれに、モウロクした目で、ついいそんなのを見てしまったんだろう。

「秋晴れの、カラソと晴れたススキ原を、ブナの葉ッパをつづつ着物になわの帯をしめた三。が、ボウボウ髪をふきなびかして海

のほうへ、ホーッって、走っていたのを見た。」

なんぞというばあさん百姓もいたが、こいつもまつ赤に、ただれたくされマナコに、秋の夕日がまぶしかったからだろう。

だけど、三コのやつたしごとのあとだけは、だれでも見ることができた。

「ここ」+橋がかかっていれば、なんばちか道になるべなア。」

などと木コリたちが、谷川の断崖に立ってなげくことがたびかさなると、ある嵐のあと、むこうの断崖に、ふといイタヤカエデの大木がおしたおされて、橋になつていることがあつた。

「三コがしてくれたんだべ。」

木コリたちは、みんなではなしあつた。

「ここ」+溜め池があれば、ひでりの夏<sup>ン</sup>なつても水にやこまらねえ

んだがなア。」

などと百姓たちが、カラソカラソにひびわれた田<sup>ン</sup>ぼつづきの林のなかでなげくことがたびかさなると、ある嵐のあと、林のなかにボカッと、大きな池ができ、水がまんまんとたたえられて、表面にさざなみを立てていることがあつた。

「三コが、してくれたんだべ。」

と、百姓たちは、みんなではなしあつた。

けれども、三コのすがたを見たものは、まだだアれもいなかつた。

ところが、とうとう、ほんとに三コを見たものがでた。それも一人や二人じゃない。おおせいのオイダラ村のオンチャたちだ。

オンチャとは、土地をわけてもられない、次男坊・三男坊たちのことだ。

すくない土地を弟たちにわけてしまえば、あととり総領たちも食えなくなる。

そこでオンチャたちは、なにかほかのしごとをしたいのだが、せまいちいさな村にしごとなんて、そんなにあるわけのものではない。「いつそふるさとをすてて、よその国を流れ歩いて、なんとかその日を食うことにするか――！」

オイダラ村のオンチャたちは、思いあまつて相談<sup>ヲ</sup>をぶとうと、オイダラ山のふもとの原にあつまつた。

ハゲ山のオイダラ山に霧が立つ。

三々五々あつまつてくるオンチャたちの背にも霧がふり、心もビックシヨリ霧にぬれた。

するとみんなは、みょうなものを見た。  
霧の中に一本柱、ふもとから山のてっぺんまで、ふとくつらぬいて二本柱が立っている。

あれは、なんだろう――――？  
霧がはれた。三コだ！

はじめてみんなにすがたを見せた三〇は、オイダラ山に腰をかけ

て、しんしんと何か、かんがえごとをしていた。

あの二本柱は、三〇の毛ズネだったのだ。

「三〇よオー、何をかんがえてるだアー。」

「オーヨ、おめえがたオンチャのことをなア。」

「おらがたオンチャは人間のくずだア、ヤメレヤメレ――。」

「おらも、もと、オンチャだつたんだどオー。」

「ホイ、アッハハハハハ。」

「おめえがた、なんとすればくらし立つウ？」

「オンチャには土地がねえから、なんとしてもダメだア！」

「ンだども、土地はみんな兄貴たちのものよオ、冷や飯くいのおら

たちア根なし草だア。」

「ヨオシ、待てエー。いまこの山を、海の中<sup>サ</sup>ぶちこんで、土地を

ふやしてけるウ。」

三〇が、四股をふむと地ひびきがして、アワ腹のオンチャたちは、

三尺もとびあがった。

それから、三〇は山へ手をかけた。山がユサンユサンとゆれはじ

めた。

三〇はしょった、山を、オイダラ山を！

海はヒイーッヒイーッて泣いた。そんなものをぶちこまれたら、

海は浅くなる。

山はもつと泣いた。山はおよげない。海にぶちこまれればブクブ

クだ。山がおよいでってはなしは、きいたことがない。

「地ビタ<sup>サ</sup>おろしてけれえ、おら氣もちわりィー。」って、山は泣

いた。山は生まれてからまだいちども、人の肩にのつたことはなかつ

たから。

雲だけはわらつた。南のほうから流れてきて、オイダラ山のテツ

ベンにかかった雲だけはわらつた。雲は見聞がひろい。南へでも北

へでもいくから。

「タハハ、三〇のばかケよ。」

「バ、ばかケとはナ、なんだ！」

三〇もオイダラ山をしじつてているから、あんまり一息には、しゃ

べれない。

「タハハ、ばかケだからばかケよ。山は山だ。海<sup>サ</sup>ぶちこむばかケ

があるか。ハゲ山のオイダラ山に木を植えろ、山しごとができりや

オンチャがたも食えら。よそのオンチャがたは、そうして食つてら。」

雲はそういうと、ホカホカわらつて行つちまつた。

「ンだンだ。」オンチャがたは手をうつてよろこんだ。

「そつか、そだナ。」三〇も、ズシィーンと山をおろした。

よろこんだのは山だ、オイダラ山だ。コロコロつてわらつた。

サア、それから三コはいそがしかった。東へ走り、北へ走り、あつちの国からすこし、こっちの国からすこしづつ、ブナ・マツ・スギ・ヒバ・イタヤカエデなどをひんぬいてきた。

なぜって一ぺんにあんまりたくさんぬいてくれば、あっちのオンチャガこまるからだ。

山はまたコロコロよろこんだ。

なぜってハゲあたまに木を植えてもらい、はだかのはだに衣を着せてもらつたんだから――。

オンチャガたはさいしょ枝をはらつた。

そのつぎには大枝をおとした。

それから幹をたおした。

そのころはもうつぎの木がそだつていたから――。

三コは、津軽とのさかいの、北の山脈に背中をのせて、山なりにながながとねそべっていた。

北の夏の夜空は、たくさん星をちりばめて、くらくおもく、ふとんのように、三コをつんでいた。三コが、もじりとあたまをうごかした。ゴトゴトと山がすこし鳴った。  
ふもとの林の小鳥たちが、巣のなかで目をあき、そして、またつぶってねた。なかにはおくびょうなやつもいて、目の見えぬままに巣からすこしとびあがったが、すぐ巣におちて、またねむつた。

星だけがゼイタクに、しきりに光り、なかには尾をひいて流れるのもあった。

三コが、モゾリ、とまたあたまをうごかした。そして大きな目玉を見ひらいた。満天の星が目にはいった。息をこらして、星を見つめたまま身うごきもしない三コのむねが、何やらやたらにさわぐのだ。

——キナくさい――！

三コは、からだをおこして山にこしけ、南の夜空をカツとにらんだ。

——なにかが、もえている！

三コは、突っ立つと、ドシドシと歩きだした。ボウボウ髪が星をはらいおとしそうに見えた。

むなさわぎはますますはげしくなり、なにやらキナくさいにおいも、ますますつよくなる。

けれども小鳥どもは巣にねむり、けものどもは林にねむっているのだから、キナくさいのは三コの氣のせいかも知れない。

小鳥がさわぎ、鹿がおきあがるのは、あれは三コの歩く地ひびきにおどろいて目をさましただけなのだ。だから三コがとおりすぎれば、すぐしずかになる。もし、ほんとうになにかがもえているのならば、あの敏いものどもが、じっとねむっているわけはない。

けれども三〇のむねは、ますますさわぐ。

三〇は、夜の山地をふみとどろかし、足をはやめて平野におりた。丘をまたぎ、米代川をザブザブとかちわたり、ちいさな部落などは、ひとまたぎにして、南へ南へと足なみをのばした。

このあたりの鳥はねでいても、けものはねでいても、こんなにむねがさわぎ、こんなにせつなく、物のこげるにおいのするのは、きっとなにか、三〇のだいじなものが、もえているのにちがいないのだ。

やがて三〇は遠く遠く、南の山のいただきが、ホーッキほどに赤くなっているのを見た。

サテコソ！

あれは、南秋田の郡、三〇のふるさとオイダラ村の見当にちがいない。いやいや、それどころか、あれはまぎれもなく、三〇が、オンチャたちのために木を植えたオイダラ山が、もえているのにちがない。

ナムサン山火事！ 三〇は地をけって走りはじめた。

走るが走るが、三〇のむねには夜鳥のむれがバチバチとぶちあたった。

鳥どもは、火にネグラをうばわれて、やかましく鳴き立てながら夜空を黒い川になつて、ひっきりなしにゾウゾウと南から北へにげ

つづけた。

三〇の足にはパチパチと小石のように行ものからだがぶちあたつた。鹿・熊・青じしどもは、火からすこしでも遠ざかるうと、まえをも見ずに、目を血ぱしらせて、南から北へにげ走った。

天の鳥と、地のけものと、二つの川をむねと足にうけながら、

三〇は風をまいて走りつづけた。

走れ 走れ 走れ！ 三〇

オイダラ山が泣いている。あついといって泣いている。

オイダラ山とオンチャたちの泣き声が、心を引きさくように、はつきりときこえた。

ジョヤサ、

ジョヤサ、

ジョヤサ！

三〇は走った、走った、走った。

ボウボウ髪はうしろに一束に、雲のようにふき流され、ムクの葉をとじた着物は黒雲のように舞いあがつた。足音の地鳴りは、にげ走るけものたちも一しゆんすくんで、ここらあたりまでなまあたたかくなつた地面につづくまるほどであった。

このとき空はもうまつ赤で、ただれた空に、あぶりだされた星たちは、死んだ魚の目玉のように白かった。それを桃色に、ときには

金色に染めあげて炎のタテガミはうちなびいた。

オイダラ山は、もえさかる金のタキギになっていた。

おそかつたのだ。もうまにあわない。三〇が北から東から、引きぬきひんぬいてきて植えた、マツ・スギ・ヒバ・イタヤカエデは、一団のタキギとなって、えんえんともえさかっていた。

三〇はぼうぜんと突っ立つたまま、オイダラ山をにらみつけて、ボロボロとなみだをこぼしていた。

「三〇か三〇か、おそかった！」

オンチャたちも泣いていた。ひざをつかみ、まだあつい地面にぶつたおれて、オンオンと泣いていた。

「三〇、すまねえ、おまえにもらつた山の木、焼いちまつた！」

「なーんもだア。山の木は、植えればまたはえらア。それに見る、あっちの森こっちの山、木はまだズッパリはえてらア。げんきをおとすな！ ダメダと思ったときがダメなんだぞウ！」

三〇はこのとき、

ヒーツ

というオイダラ山の身をよじるようなさけびをきいた。

見ると、金色にもえただれたオイダラ山のてっぺんが、すこしくずれて、ふもとへ金のタキギがもえおちた。

金の龍のようなそいつが、やはなれたふもの黒い森へ頭を突っ

こむと、森はしづかにブスブスとふすぶりはじめた。

「オイノ森 ザ火がついたぞ！」

オンチャたちの、そっちに近い何十人かがトビロ・ナタ・マサカリを持ってオイノ森へ走つていった。木をきりたおして、もえひろがるのをふせごうというのだ。

「ああだめだ、また上から火がくずれるぞ！」

指さす一人のオンチャの指の先では、遠くオイダラ山のてっぺんの火が、またあやうくくずれそうに煮えだぎついていた。

「こうしてくずれて、つぎつぎあちこちに火の滝が降つてきたら、もうどうにも手がつけられねえ。山火事は、北の北までもえでくぞ！」

秋田の国じゅう火の海だア……。」

かおじゅう涙とススでべちょべちょによじして、じいさま百姓がそううめいた。

「ナーニ、そん、こと、させてたまるかア！」

三〇はさけんでみんなのほうをむいた。もういちどオンチャたちをジッとよく見た。そしてニコッとわらつた。

「いいかア、火がきえたら、焼けあとには木を植えるんだぞウ。ハッハッ、焼け山の土はよく肥えて、木はスンスンなんぼでも伸びらア！ みんな。オンチャがた。マメでくらせエ！」

三〇は言いおわると、オイダラ山にむきなおつて、オイダラ山に

かぶさった。

三コのむねの下でグザグザと、白金のオキがくずれた。パツと火の粉の柱が空に舞いあがった。

けれども、三コはからだをはなしはしなかった。三コはますます固く、オイダラ山をだきすぐめた。

ブスブスと、肉の煮えただれるにおいがした。三コのボウボウ髪に火がついた。ムクの葉をつづった着物にも火がついて、着物はいぢど金色にかがやき、はなれたムクの葉がムク鳥のように舞つたがやがてそれもしづまつた。

空はやや暗くなり、星がみずみずしくかがやきはじめた。

百姓がたは、みんな膝をついて、オイダラ山へむかって、三コへむかって、両手を固くにぎってあわせていた。

だれも声はらず、ことばもしゃべれず、顔をビタビタによごしていた。

オイダラ山からはふすぼるけむりが立ちのぼり、立ちのぼり、三コのからだは見えなくなつて、星だけが暗い夜空にあらいだしたようにながやいていた。

それから何年も何年もたつて、秋田は木の国になつた。秋田の山はどこへいっても昔のオイダラ山みたいなハゲ山はなくなつた。

みんな三コが植えてまもつた木のかぶをわけて、オンチャがたが

山じごとをするようになつたから――。

三コは、死んだ。そのあと三コを見たものはもうだれもいない。

三コはもういいか？　いいや、三コは、いる。三コみたいなオンチャたちがうんとそだつた。

いまでもオンチャがたのくらしがこまると、三コみたいに考えるやつだの、山を海にブチこもうとするやつだの、東や北から木を集めくるやつだのがでてくるからな――。

## 二 授業構想

授業構想として、次の内容で記述する。

### (1) 教材文「三コ」の各場面

第一場面	一ページ	～	三ページ十一行目
第二場面	三ページ十二行目	～	六ページ十一行目
第三場面	七ページ一行目	～	九ページ三行目
第四場面	九ページ四行目	～	十二ページ十行目
第五場面	十二ページ十一行目	～	十五ページ五行目
第六場面	十八ページ一行目	～	二十ページ十行目
第七場面	二十一ページ一行目	～	二十六ページ五行目
第八場面	二十六ページ五行目	～	二十八ページ二十一行目

第九場面 三十ページ一行目 ～ 三十一ページ十八行目

第十場面 三十三ページ一行目 ～ 三十三ページ十三行目

(第五場面～第六場面でページがとんでいるのは挿し絵の部分)

(2) 教材解説

(3) 本時の目標

(4) 板書

(5) 発問

(6) まとめの板書

五里<sup>⑯</sup>一十里<sup>⑯</sup>一二十里<sup>⑯</sup>……。

それから、せいがデッカクなりはじめたらしい。

ちいさな村の、ちいさな土地にしばりつけられて、四つばかりになつてくらすことには、しんぼうならなくなつたんだろう。からだがそだつたのは、魂<sup>⑯</sup>がそだつたからだろう。

——とにかく、三〇は風にのつて、秋田じゅうをかけまわりはじめた。

五月<sup>⑯</sup>の青葉の風のなかで、十一月<sup>⑯</sup>のものすごい吹雪のつむじ風の

なかで、

〔ウオーウイ ウオーウイ〕

とさけぶ三〇の声をきいたというものが、何人もでてきた。

何百年ものあいだに何人かだから、三〇の声をきいたものはわずかだが、たしかにきいたものがあるのだから、三〇は生きているにちがいないといわれた。

けれども、すぐたを見たものは、だれもいない。

〔寒風山から吹きおろす北風のせんとうに立って、山のような大男

た。|

オイダラ村あたりの、水のみ百姓の小セガレ<sup>⑯</sup>だったことはたしかだ。三吉か三太か、ほんとうの名前さえチャントでなく、三〇と半ばにしか呼んでもらえないのが何よりのしようこだ。

そいつがいつのころからか、秋田の平野を風にのつてかけはじめた。

〔寒風山から吹きおろす北風のせんとうに立って、山のような大男

が、<sup>(31)</sup>ワツシ、ワツシと走っていたのを見た。」

なんぞというじいさん百姓もいたが、これはあんまり北風がさむ  
<sup>(32)</sup>のに着物がうすいから、さむさのまぎれに、モウロクした目で、  
ついそんなものを見てしまったんだろう。

「秋晴れの、<sup>(33)</sup>カラソと晴れたススキ原を、<sup>(34)</sup>ブナの葉っぱをつづつ  
た着物になわの帯をしめた三<sup>(35)</sup>ヶ、ボウボウ髪をふきなびかして海  
のほうへ、<sup>(36)</sup>ホーッって、走っていたのを見た。」

なんぞというばあさん百姓もいたが、こいつもまつ赤に、ただれ  
たくされマナコに、秋の夕日がまぶしかったからだろ<sup>(37)</sup>う。

## (2) 教材解釈

### ① 「ヨ」

- 特に意味を持たず種々の語につく。
- 東北地方の方言に多い。

② 「平野の子」

- 自然児<sup>II</sup>社会の因習に染まらず、野生動物のような純粹さや  
荒々しさ、たくましさを備えた人

・ 広々とした心を持つた大らかな人物

・ とてもなくスケールの大きさ

・ たくましさ、純粹さ、土のにおい

・ 平野で育った野性の人物

### ③ 「だれも知らない」

- 今生きている者も、語り手自身も出生については知らない。
- 語り継がれてきた伝説の人物

### ④ 「ずっとむかしから生きていた」

- 長寿であること

- 不思議な人物であること

### ⑤ 「水のみ百姓」

- 田畠を所有しない貧しい小作、または日雇いの農民
- 小作<sup>II</sup>地主から土地を借り、小作料を払ってその土地を自ら

### 耕作し、農業を営むこと

水のみ百姓 ↑ ↓ 本百姓

### ⑥ 「小セガレ」

- 青年・少年をののしって言う語、年少の男を卑しめて言う語
- 身分や地位が低い子供



・ とるに足りない子供

⑦ 「たしかだ」

- ・ 出生については誰も知らないが、貧しい百姓のとるに足りない子供であることは間違いない。

⑧ 「チャンント」

- ・ 名前さえもまともに呼んでもらえないような境遇で育った
- ・ カタカナによる強調

⑨ 「しょうこ」

- ・ 確実なのは、水のみ百姓の小セガレで、ほんとうの名前さえ半ばにしか呼んでもらえないこと

- ・ 貧しくみじめな生い立ちで、人々から一人前扱いをされていなかつたこと

⑩ 「そいつ」

- ・ 一般的には、人を軽蔑して、または無遠慮に呼ぶ語

- ・ 語り手が無遠慮に三ヶを「そいつ」と語れるのは、三ヶとの関係に強い絆、一体感が存在するから

⑪ 「いつのころからか」

- ・ このことも明確ではない。

⑫ 「かけはじめた」

- ・ 何のためなのかもここでは説明されていない。

⑬ 「だろう」

- ・ 「風にのってかけはじめた」理由

⑭ 「五里——十里——二十里————」

・ 距離が倍

- ・ 「——」は、四十里、八十里と距離が大幅に増えていく。

⑮ 「デッカク」

- ・ デカイの促音化（「っ」）、大きい意の俗語
- ・ カタカナによる強調

⑯ 「らしい」

- ・ 今まで断定的な語りであつたが、初めて推定が出てくる。

- ・ 確かな伝聞などに基づく推定＝「風にのってかけはじめた」と

⑰ 「しばりつけられて」

- ・ ちいさな村のちいさな土地で暮らさざるを得ないこと

- ・ 生まれた時からの境遇からとび出すことができないこと
- ・ 定められた運命から逃れることができないこと

⑱ 「四つゝぱい」

- ・ 地主などの言うままで従つて暮らすこと

- ・ 二本足で立つという自立した、思いのままの暮らし了出来ないことを象徴

⑲ 「かけはじめた」

「しばりつけられ」「四つゝぱい」→「しんぼうならなくなつた」

⑯ 「魂」

精神、氣力、思慮分別、才略

「風にのつてかけはじめた」

←  
「せいがデッカクなりはじめたらし」=からだがそだつた

⑰ 「魂がそだつたからだろう」

からだがそだつた理由の推量

魂——心がそだつたことによつて、体がそだつた。

文の入れ替え——順序性からだと次のように

ちいさな村の、ちいさな土地にしばりつけられて、四つゝぱ

いになつてくらすことに、しんぼうならなくなつたんだろう。

そいつがいつのころからか、秋田の平野を風にのつてかけはじめた。

五里——十里——二十里——。

それから、せいがデッカクなりはじめたらし。からだがそ

だつたのは、魂がそだつたからだろう。

本文では、「風にのつてかけはじめたこと」と「せいがデッカクなつたこと」をまとめて、理由の説明をしている。

⑭ 「秋田じゅう」

前は「秋田の平野を」

⑮ 「かけまわりはじめた」

前は「かけはじめた」

・ 体が育つたことにより行動範囲が拡大したこと

⑯ 「五月」「十二月」

・ 五月——夏——生命力があふれる時——暑さ

・ 十二月——冬——生命力が乏しい時——寒さ

⑰ 「青葉の風」「ものすごい吹雪のつむじ風」

・ 風が対照的であること

・ 「つむじ風」=渦のようく巻いて吹き上がる風

⑱ 「ウオーアイ ウオーアイ」

・ 「ウオーアイ、ウオーアイ」は非連続的な叫び

・ 「ウオーアイ ウオーアイ」は連続的な叫び

・ 自分が生きていること、成長したこと、魂が育つたこと、せ  
いがデッカクなつたことなどの実感、確かめ、満足感からの叫  
びであろう。

⑲ 「何百年ものあいだ」

・ 「ずっとむかしから生きていた」と対応  
・ 「たしかにきいたものがある」

・ 伝説のように語り継がれてきていたが確証にとぼしかったが

「声」を聞いたという事実はあった。

・ 「生きているにちがいないといわれた」

・ 「声」を聞いたという事実から、三〇に生きていてほしいといふ人々の願望からのもの

・ 「寒風山から吹きおろす北風」

・ 風が寒い山と北風の寒さ——寒さの重なり

・ 「山のようだ大男」

・ 「せいがデッカク」と対応

・ 「三〇」とは言っていない

・ 「ワッシ、ワッシと走つていた」

・ 力強く豪快な走り

・ 「ワッシ、ワッシ」に読点があり、山のようだ大男だから、

・ ピッチ走法ではなくストライド走法で

・ 「着物がうすい」

・ 厳寒の中でも重ね着や綿入りの着物を着ることのできない赤

・ 貧乏

・ 「モウロク」

・ おいばれること

・ 年老いて頭や体の働きが鈍くなる

・ 「見てしまつたんだろう」

・ 「さむさのまぎれ」と「モウロクした目」が原因だと語り手

は推量

・ これも確証がない——見たのはたつた一人のじいさん百姓

だから

・ 「カラソ」

・ 何もなく広々としたさま

・ 「ブナの葉っぱをつづった着物になわの帶」

・ 「つづる」=継ぎあわす

・ 「ブナ」も「なわ」も自然界（山や田）で調達できるもの

・ 着衣からも自然界に生きる不思議な人物であることが分かる

・ 「ボウボウ髪」

・ 乱れてばさばさしている髪

・ 「ふきなびかして」

・ 髪が後ろへ流れるような形

・ 「ホーッって」

・ あれあれと思うほどの速さで

・ 「だろう」

- ・「まっ赤に、ただれたくされマナコ」
- ・「夕日がまぶしかった」

←

### 原因の推量

←

- たつた一人のばあさん百姓のため確証がない

- ・じいさん百姓 → 山のような大男

- ・ばあさん百姓 → 三ヶ

- ・着衣は、ばあさん百姓の指摘通り（挿し絵から）

### (3) 本時の目標

ずっと昔から生きていると言われた三ヶは、秋田じゅうを風にのってかけまわりはじめたが、その姿を見たものは誰もいなかつたことが分かる。

### (4) 板書

上段は読み取らせたい内容の手がかりとなる言葉であり、下段は読み取らせたい内容である。

- ・自然児

平野の子

- ・広々とした心を持った大らかな人物
- ・とてつもなくスケールの大きさ
- ・たくましさ、純粹さ、土のにおい
- ・平野で育った野性の人物
- ・だれも知らない
- ・今生きている者も語り手も
- ・語り継がれてきた伝説の人物
- ・水のみ百姓の小セガレ
- ・貧しくみすぼらしい子ども
- ・とるに足りない子ども
- ・名前さえまともに呼んでもらえない
- ・人々から一人前扱いをされていない
- ・カタカナによる強調
- ・三ヶと語り手の強い結びつき、一体感
- ・距離が倍
- ・四十里、八十里と大幅に増える
- ・想像した言ひ方
- ・ちいさな村のちいさな土地で暮らしがなかつた
- ・生まれた時からの貧しいままの暮らし
- ・決められた運命から逃げることができ

チャント

五里——十里——  
二十里——  
らしい  
しばりつけられて

上段は読み取らせたい内容の手がかりとなる言葉であり、下段は読み取らせたい内容である。

- ・生まれた時からの貧しいままの暮らし
- ・かなかつた
- ・決められた運命から逃げることができ

ない

・心、精神、考え、判断力、知恵

秋田じゅう  
・「秋田の平野」

かけまわりはじめた  
・「かけはじめた」

五月 十二月  
・行動範囲が大きく広がった

・暑い時も寒い時も

一年中  
・叫びが連續していない

・生きていること、成長したこと、魂が

育ったこと、せいがデッカくなつたこ

となどの実感、確かめ、満足

語りつがれてきた

・人々の願い

・力強くごうかな走り

・ストライド走法

・年老いて頭や体の動きがにぶくなる

モウロク  
・理由「さむさのまぎれ」「モウロクし

見てしまつたんだろう

た目」  
・確かにしあこはない

・何もなく広々とした様子

カラソ

ブナの葉っぱをつづつ

・つづる||つなぎあわす

た着物になわの帯

・自然の中で調達できるもの  
ホーッって  
・あれあれと思うほどの速さ

だろう  
コ」「夕日がまぶしかった」

・確かにしあこはない

・じいさん百姓→山のような大男  
・ばあさん百姓→二〇

### (5) 発問

これから記述する発問は、教師が主導し教師の意図に沿つて子供たちに発言させるためのものではない。これは「はじめに」で授業で意図したことの一項目に該当するものであり、私の発問から授業が始まるのではない。まず、子供たちの読み取りを優先して発表させ、読み取れていらない所やもう少し深めて読んでほしい時、それには読み方を教えるのみ発問をするのである。従つて、私の授業には「課題」がない。私が先に枠を与えたり課題を提示したりしないで、まず子供たちが自分で読み取つたことを自分から話すようにした授業スタイルである。これから記述する発問は、子供たちが読み取つていれば不用な発問も含まれていることをまず断つておきたい。

次に、もう一つ断っておきたいことは、一つの場面をある程度のまとまりごとに読んでいくということである。これを子供たちと相談して「立ち止まり」とネーミングした。場面全体を対象にして子供の発言を優先すると、いきなり場面の最後の部分の発言であったり、真ん中辺りであつたりとばらばらで拡散的になってしまふ。また、子供たちの読みも部分的に終始してしまうからである。それで、作品は時間の流れに沿つて展開していること、読む場合もそれに沿つて積み上げながら読んでいくことの必要性を理解させる必要がある。

例えば、第一場面での「立ち止まり」は、次の通りである。  
「立ち止まり」① 始めから一ページ七行目まで  
「立ち止まり」② 一ページ八行目から十九行目まで  
「立ち止まり」③ 三ページ一行目から十一行目まで  
これは子供の実態とも関わるので、第二場面以下は記述しない。

(f) ほんとうの名前さえ「チャント」呼んでもらえないことから、どんなことが分かるか。

(g) カタカナの「チャント」とひらがなの「ちゃんと」を比べてみるとどうのような違いがあるか。

(h) 「そいつ」

① 「そいつ」とは誰のことか。

② 「そいつ」という言い方は、ふつうどんな意味で使われるか。  
③ この場合の使い方は、三ヶを見下した使い方かどうか。  
④ この場合の使い方は、どんな意味の使い方か。

(i) 「五里——十里——二十里——」  
① 「——」は何を表しているか。  
② 五一——十——二十という数の増え方は、三ヶの何を表しているか。

(j) 「らしい」  
① ここまで文末表現は、どのように書かれているか。  
② 「だ」「ない」「いた」と「らしい」を比べてみるとどんな違ったがあるか。

(k) 「しばりつけられて」「四つぱいになつてくらす」とは、どんなんくらしであったか。

(l) 「魂」を別の言葉で言い換えてみよう。

- (e) 「平野の子」からどんな人物が想像できるか。  
(b) 「だれも知らない」とあるが、この「だれ」とは誰のことか。  
(c) 「だれも知らない」のに、なぜ三ヶのことを知っているのか。  
(d) 三ヶの「こ」は、特に意味がなく、いろいろなことばの終わりにつく。東北地方の方言に多い。「ちゃわんこ」「ぜにこ」

「水のみ百姓の小セガレ」から、どんなことが分かるか。

(m) 「秋田じゅう」

- ① 前はどうのように表現されていたか。

② 「秋田じゅう」から三ヶの何が分かるか。

「かけまわりはじめた」

- ① 前はどうのように表現されていたか。

② 何のために「かけはじめた」のか想像してみよう。

「五月」「十二月」からどんなことが分かるか。

「ウォーイ、ウォーイ」

- ① 「ウォーイ、ウォーイ」と「ウォーイウォーイ」を比べてみ

るとどうのうな違いがあるか。

② 「ウォーイ、ウォーイ」と三ヶがさけぶのは、どんな時な

か想像してみよう。

「たしかにきいたもの」があるとか「生きている」にちがいな

いとはどんな理由からだろう。

「ワッシ、ワッシ」という走り方からどんなことが分かるか。

「モウロク」とは、どんな状態なのか。

「見てしまったんだろう」という理由は何か。また、それは確

かなことか。

「カラソ」とは、どんな様子を表しているか。

「ブナの葉っぱをつづった着物になわの帯」

(n) 「つづる」とは、どのようにしてあることか。

② 「ブナの葉っぱをつづった着物になわの帯」から分かること

は何か。

「ホーッって」とは、どんな走り方か。

「だろう」

① 「だろう」という理由は何か。また、それは確かなことか。

② じいさん百姓とばあさん百姓の見た者をどのように表現して

いるか。

## (6) まとめの板書

授業の終末でのまとめは、あいだの感想、場面の小主題、「まとめの一回勉強」のように先生や友だちの教えや意見を付加したり修正したりして再構築させる方法などがある。しかし、四十五分の授業の中で時間を十分に用意してまとめさせるということは、子供にとってなかなか難しいことである。そこで「もの・こととの相関関係」を図で表す方法を取り入れる。「もの・こと」の「もの」とは「者」「物」のことであり、「こと」とは「出来事」のことである。それがどのような関係になっているのかを図で示し、その関係をキーワードで表すというものである。この関係図でまとめをしておけば、他のまとめ方にも十分活用できるものである。

第一場面

語り手

平野の子

水のみ百姓の小セガレ  
チャント

そいつ

しばりつけられて

魂

かけまわりはじめた  
ウォーイ、ウォーイ

三  
じいさん百姓  
見てしまったんだろう  
ばあさん百姓  
まぶしかったからだろう

なる」と、ある嵐のあと、むこうの断崖に、ふといイタヤカエデの大木がおしたおされて、橋になつていてることがあった。  
「三」<sup>⑧</sup>がしてくれたんだべ。」  
木コリたちは、みんなではなしあつた。  
「ここ、<sup>⑨</sup>溜め池があれば、ひでりの夏<sup>⑩</sup>なつても水にやこまらねえんだがなア。」

などと百姓たちが、カラんカラんにひびわれた田<sup>⑪</sup>、ぼづきの林のなかでなげくことがたびかさなると、ある嵐のあと、林のなかにボカツ<sup>⑫</sup>と、大きな池ができ、水がまんまんとたえられて、表面にさざなみを立てていてことがあった。

「三」<sup>⑬</sup>が、してくれたんだべ。」

と、百姓たちは、みんなではなしあつた。

けれども、三」<sup>⑭</sup>のすがたを見たものは、まだだあれもいなかつた。

できた。

(1) 教材文 『第一場面』

だけど、三」<sup>①</sup>のやつたじごとのあとだけは、だれでも見ることが

「ここ、<sup>②</sup>橋がかかつていれば、なんぼちか道になるべなア。」  
〔③〕<sup>④</sup>などと木コリたちが、谷川の断崖に立ってなげくことがたびかさ

- ① 「じごとのあとだけは」  
② 「」  
③ 「」  
④ 「」  
⑤ 「」  
⑥ 「」  
⑦ 「」  
⑧ 「」  
⑨ 「」  
⑩ 「」  
⑪ 「」  
⑫ 「」  
⑬ 「」  
⑭ 「」  
⑮ 「」

(2) 教材解説

事の跡という客観的な事実は多くの者が目にした。

② 「なんぼ」

・ どれほど、どれだけ

③ 「なるべなア」

・ なるのになあ

④ 「断崖」

・ きり立っているけわしいがけ

⑤ 「なげく」

・ ため息をつく、本当に困っている、非常に困っている

⑥ 「たびかさなる」

・ 同じことが何度もひき続いて起こる。

・ 三。がどこかで、木コリたちのなげきを聞いている。

⑦ 「ある嵐のあと」

・ 三。は自分がやったことを見せない。

・ 自然現象のように見せかけている。

⑧ 「三。がしてくれたんだべ」

・ 「ふといイタヤカエデの大木」「おしたおされて」から、木

コリであるだけに普通の人間の仕様ではないことが分かる。

・ 「橋になつていい」とことから、自然現象ではなく、自分たち

の願いが現実になつていて。

⑨ 「カラランカララン」

・ 「からから」=物がかわき切つている様子

⑩ 「田んぼつづきの林のなか」

・ 日照りの夏、田の様子を見に来た百姓たちが、近くにある

林の中で涼みながら

⑪ 「ボカツ」

・ 急に、いきなり

橋 → 木コリ

—「なげくことがたびかさなると」

溜め池 → 百姓

・ 貧しい人々の仕事上の悩みを、三。にできることで裏から支

援している。

⑫ 「まんまん」

・ いっぱいに、十分に

⑬ 「たたえられて」

・ 水などをいっぱいに満たす、あふれるばかりにする

⑭ 「さざなみ」

・ 細かく立つ波

⑮ 「まだだれもいなかつた」

・ 「三。がしてくれたんだべ。」とは言いながら、三。を見た

者は一人もいない。

・ 声を聞き、生きているにちがいないと言われているが、姿を

見た者はいない。

・ 三〇が登場する予想、伏線

(3) 本時の目標

三〇の姿を見た者はなく、見えるのは仕事の跡だけであったことが分かる。

(4) 板書

しごとのあとだけ

・ 三〇の姿は見ていない

なげく

・ ため息、本当に、非常に困っている

たびかさなる

・ 三〇がどこかで聞いているのだろう

ある嵐のあと

・ 三〇は自分がやったことを見せない

・ 自然現象＝嵐のように見せかけている

三〇がしてくれたんだべ

・ 普通の人間ではできないこと

・ 自分たちの願いがかなっている

ボカツ

・ 橋→木コリ、溜め池→百姓

・ 貧しい人々を裏から支えている

まだアレもいかなかった・三〇が登場する予想

・ 伏線

(5) 発問

(a) 「しごとのあとだけは」見ることができたが、何を見ることができなかつたのか。

(b) 「なんば」を別の言い方にしてみよう。

(c) 「なるべなア」を別の言い方にしてみよう。

(d) 「断崖」とはどのようになっている所か。

(e) 「なげく」を別の言い方にしてみよう。

(f) 「たびかさなる」を別の言い方にしてみよう。また、それを誰が聞いていたと考えられるか。

(g) なぜ「ある嵐のあと」に願いがかなつてているのか。

(h) 「三〇がしてくれたんだべ」という理由は何か。

(i) 「カラソカラソ」とはどのような様子なのか。

(j) 「ボカツ」を別の言い方にしてみよう。

(k) 橋や溜め池ができていることから、三〇のどのような思いが考えられるか。

(l) 「まんまん」とはどのような様子なのか。

(m) 「たたえられて」とはどのような様子なのか。

(n) 「さざなみ」とはどんな波のことか。  
「まだアれもいなかつた」は、次に何を予想させるか。また、

こういう表現の仕方を何というか。

ところが、とうとう、ほんとに三〇を見たものがでた。それも一  
まいちいさな村にしじとなんて、そんなにあるわけのものではない。  
オイダラ山のふもとの原にあつまつた。

①

②

③

④

(6)

まとめの板書

第一場面

語り手

しじとのあとだけ

なげく

たびかさなる

ある嵐のあと

橋

溜め池

三〇がしてくれたんだべ

すがたを見たもの

まだアれもいなかつた

ツシヨリ霧にぬれた。

するとみんなは、みょうなものを見た。

霧の中に一本柱、ふもとから山のてっぺんまで、ふとくづらぬい

すくない土地を弟たちにわけてしまえば、あととり総領たちも食えなくなる。

⑤

⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰

そこでオンチャたちは、なにかほかのしじとをしたいのだが、せまいちいさな村にしじとなんて、そんなにあるわけのものではない。「いっそふるさとをすてて、よその国を流れ歩いて、なんとかその日を食うことにするか-----！」

オイダラ村のオンチャたちは、思いあまつて相談をぶとうと、

オイダラ山のふもとの原にあつまつた。

ハゲ山のオイダラ山に霧が立つ。

三々五々あつまつてくるオンチャたちの背にも霧がふり、心もビ

て二本柱が立つている。

⑥「いっそ」

- ・ むしろ。思い切って

⑦「よその国」

- あれは、なんだろう……？  
⑯「霧がはれた。三々だ！」

秋田以外の国。青森、山形、宮城、福島、岩手などの国

⑧「流れ歩いて」

- ・ あてもなく、あちこちさまよい歩く

⑨「その日を食う」

- ・ その日の収入で、その日をやつとくらす

⑩「―――！」

- ・ オンチャたちの悲痛な思いを強調

⑪「思いあまつて」

- ・ たえがたいほど思つ。思ひなやん、心の中だけでは処理で

きない。

⑫「ぶとう」

- ・ ぶつ=語ることの強調

⑬「ハゲ山」

- ・ オンチャたちがこの山に木を植える伏線

⑭「立つ」

- ・ 雲、霧、煙などが現れ出る。

⑮「三々五々」

- ・ 百姓以外の仕事
- ・ 現在でも若者が仕事を求めて都会へ流出する。

・人が三人、また五人ぐらいずつ続いて歩いていく様子

・三人、五人とかたまりながら、行く末のことを話ながら集まつてきただろう。

⑯「心もビックショリ霧にぬれた」

・ビックショリ!!ひどくぬれている様子。憂い、ふさぐことの強調

・将来のことを考えると、どうすればよいのか迷いに迷い、暗い気持ちになっている。

⑰「みょう」

・不思議な、普通でない

⑯「霧の中に日本柱、ふもとから山のてっぺんまで、ふとくつらぬいて二本柱が立っている」

・二本柱が繰り返して語られ、説明が具体的になつていて。

・⑯⑯を一つの文にすると次のようになる。

するとみんなは、霧の中に二本柱、ふもとから山のてっぺんまで、ふとくつらぬいて一本柱が立っているみょうなものを見た。

⑯「あれ」

・二本柱のこと

⑳「――?」

・状況が不明の中で、オンチャたちがいろいろと考えている

㉑「霧がはれた」

・三コをいきなり登場させず、神秘的劇的な登場

・心の迷い、なやみが晴れる伏線

㉒「三コだ!」

・今まで姿を見せたことのない不思議な人物、語り継がれるだけであつた三コが自分たちオンチャの前に初めて姿を現したことへの感動

㉓「しんしんと」

・ひっそりと静まりかえっている様子

㉔「かんがえごと」

・オンチャたちの将来、仕事をどうしたらよいか。

・三コも考え方あぐね、心配から姿を現すことになった。

(3) 本時の目標

思いまつて相談をしようと集まつたオンチャたちの前に、初めて三コが姿を現したのは、オンチャたちの将来や仕事が心配であつたからであることが分かる。

(4) 板書

オイダラ村

オンチャ

あととり総領

食えなくなる

ほかのしごと

よその国

その日を食う

「―――！」

思いあまつて

ハゲ山

三々五々

心もビッシヨリ霧に

ぬれた

「―――？」

霧がはれた

・心の迷い、なやみが晴れる伏線

- ・オンチャたちのいろいろな考え方
- ・神秘的、劇的な登場

・三〇のふるさと

・土地をわけてもらえない

・次男坊・三男坊

・仕事がない

・家のあとをつぐ人、長男

・生活していけなくなる

・百姓以外の仕事

・青森、山形、宮城、福島、岩手など

・その日の収入でその日をやっとくらす

・悲痛な思いの強調

・思いなやんで

・オイダラ山

・オンチャたちが植林する伏線

・三人、五人とかたまりながら

・将来のこと、仕事を話をしながら

・将来のこと、仕事のことに解決策がない

・迷い、暗い気持ち

・「―――？」

- (m) 「ぶとう」を別の言葉で言い換えてみよう。
- (n) そんなに「思いあまつて」いるのか。
- (o) 「―――！」は何を表しているか。
- (p) 「―――！」を別の言葉で言い換えてみよう。
- (q) 「流れ歩いて」を別の言葉で言い換えてみよう。
- (r) 「その日を食う」を別の言葉で言い換えてみよう。
- (s) 「いつそ」を別の言葉で言い換えてみよう。
- (t) 「よその国」とは、秋田以外のどんな国が考えられるか。
- (u) 「思ふ」を別の言葉で言い換えてみよう。
- (v) 「思ふ」を別の言葉で言い換えてみよう。
- (w) 「思ふ」を別の言葉で言い換えてみよう。
- (x) 「思ふ」を別の言葉で言い換えてみよう。
- (y) 「思ふ」を別の言葉で言い換えてみよう。
- (z) 「思ふ」を別の言葉で言い換えてみよう。

三〇だ！

しんしん

かんがえごと

・そのために姿を現した

・初めて姿を現したことによる感動

・ひっそりと静まりかえって

・オンチャたちの将来、仕事のこと

(5) 発問

「オイダラ村」と三〇にはどんな関係があるのか。

「オンチャ」とは、どういう人たちなのか。

次男に「坊」がついているのは、なぜなのか。

「あととり総領」とは、どういう人か。

「食えなくなる」とは、どうなることか。

「ほかのしごと」の「ほか」とはどんな仕事のことか。

「いつそ」を別の言葉で言い換えてみよう。

「よその国」とは、秋田以外のどんな国が考えられるか。

「流れ歩いて」を別の言葉で言い換えてみよう。

「その日を食う」を別の言葉で言い換えてみよう。

「―――！」は何を表しているか。

「―――！」を別の言葉で言い換えてみよう。また、何を

(n) 「ハゲ山」は後の話と関係してくるが、このような表現の仕方を何と言つたか。

(o) 「三々五々」とは、どんな意味か。また、この時オンチャたちは何を話していたと想像できるか。

(p) 「心もビッショリ霧にぬれた」とあるが、オンチャたちの様子や気持ちはどうであったか。

(q) 「みょう」を別の言葉で言い換えてみよう。

(r) 「あれ」とは何のことか。

(s) 「――？」は何を表しているか。

(t) 「霧がはれた」とあるが、なぜここで霧をはらしたのか。

(u) 「霧がはれた」とあるが、どんなことの伏線になつてているのか想像してみよう。

(v) 「三々だ！」から分かることは何か。

(w) 「しんしんと」を別の言葉で言い換えてみよう。

(x) 「かんがえこと」とは、どんなことなのか。

(6) まとめの板書

(1) 教材文《第四場面》

あの二本柱は、三々の毛ズネ①だったのだ。

「三々よ②、何をかんがえてるだア③！」

「オーヨ、④おめえがたオンチャのことをなア⑤。」

「おらがたオンチャは人間のくずだア、ヤメレヤメレ⑥。」

「⑦。」

第三場面

オンチャ

オイダラ村

よその国

流れ歩いて

その日を食う

思いあまつて相談コ

三々五々

心もビッショリ霧にぬ

れた

みょうなもの

二本柱  
霧がはれた  
しんしん  
かんがえこと

三

オイダラ山のふもとの原

コ

「おらも、もと、オンチャだつたんだぞー。」(8)

「ホイ、アッハハハハハ。」(9)

「おめえがた、なんとすればくらし立つウ？」(10)

「オンチャには土地がねえから、なんとしてもダメだア！」(11)

「ンだとも、土地はみんな兄貴たちのものよオ、冷や飯くいのおら

たちア根なし草だア。」(12)

「ヨオシ、待てエー。いまこの山を、海の中ナぶちこんで、土地を

ふやしてけるウ。」(13)

三コ19が、四股20をふむと地ひびきがして、アワ腹18のオンチャたちは、

三尺19もとびあがつた。

それから、三コ21は山へ手をかけた。山がユサンユサン22とゆれはじ

めた。

三コ21はしょつた、山を、オイダラ山を！(23)

海はヒイーッヒイーッて泣いた。そんなものをぶちこまれたら、

海は浅くなる。(24)

山はもっと泣いた。山はおよげない。海にぶちこまれればブクブ

(25)

- ⑤ 「人間のくず」
- ・ 役に立たない者、つまらない者、とるに足りない者

クだ。山がおよいでってはなしは、きいたことがない。(26)

「地ビタナおろしてけれえ、おら氣もちわりイー。」って、山は泣

いた。山は生まれてからまだいちども、人の肩にのつたことはなか

つたから。

(2) 教材解釈

- ① 「毛ズネ」

- ・ 毛深いですね

- ・ 三コ19の大きさ→前に「山のような大男」と表現

- ② 「一」

- ・ オイダラ山に腰かけるような大男の三コ19に語りかけるには、

- ・ 語尾を伸ばす話し方になる。

- ③ 「おめえがた」

- ・ 「がた」=敬意を含んで複数を示す。

- ・ おまえさんたち

- ④ 「オンチャのこと」

- ・ オンチャの将来のこと、仕事のこと

・ 決まつた仕事もなく、将来のことも希望の持てない自分たちを人間として劣った者として卑しめている。

⑥「ヤメレヤメレ」

- ・ 人間のくずの自分たちのことを考えるのは申し訳ないからやめてほしい。

⑦「-----」

- ・ 自分たちのことを真剣に考えてくれる三〇にやめてくれといながらも、うれしく思い感激している。

⑧「おらも、もと、オンチャ」

- ・ 自分たちのことを人間のくずだと卑しめているオンチャたちに、自分の出生を明らかにして励ましている。

・ 同胞 同類、仲間であること

・ 自分のふるさとのオンチャたちの前に姿を現した理由

⑨「アッハハハハハ」

- ・ 三〇が自分たちと同じ仲間のオンチャであることのうれしさ、親近感、頼もしさ

⑩「なんとすれば」

- ・ 三〇も考えあぐねて、どうしたらよいかを尋ねている。

⑪「くらし立つ」

- ・ くらしていける、生活していける

⑫「なんとしてもダメだア！」

- ・ 土地がないから、どうしてもくらしが立たないと強く言い切つている。

⑬「ンだども」

- ・ そうだとも

⑭「冷や飯くい」

- ・ 江戸時代に、家督を相続しない次男以下の者を卑しめて言った言葉

⑮「根なし草」

- ・ 漂い動いて定まらないもの

- ・ 土地を持たない次男以下の者は、くらしをたてるすべがなく、一定の場所ではくらしていけない。あちこちで仕事をさがして漂つてくらすしかない。(＝よその国を流れ歩いて、なんとかその日を食うことにするかと同じ)

⑯「土地をふやしてけるウ」

- ・ オンチャたちとのやりとりで単純に土地を増やすことを三〇は考えた。

・ 三〇も百姓以外の仕事を考えることができなかつた。

・ 山を海へぶちこむとは、豪快な三〇らしい考え方

⑯ 「四股」

- ・ 相撲で、力士が土俵上でする準備運動。足を開いて構え、左

右かわるがわる高く揚げて手を膝頭にそえ力を込めて地を踏む。

⑰ 「アワ腹」

- ・ 米や麦が食べられず粟を食べている貧しさ

・ 粟飯ではすぐ腹が減る。

⑱ 「三尺も」

・ 一尺 ≈ 約三十三センチメートル

- ・ アワ腹でやせていることもあるが、三コの四股で約一メート

ルもとび上がった。

⑲ 「ユサンユサン」

- ・ 三コが山を持ち上げようとするため、ゆっくり大きく揺れる様子の擬態語

⑳ 「三コはしおった、山を、オイダラ山を！」

- ・ 「しおう」 = 背負う、背にのせる

・ 倒置法

- ・ 三コが山を、オイダラ山を背にのせた驚きが「！」

- ・ ものすごい力、けたはずれな力

㉑ 「海はヒイーッヒイーッて泣いた」

・ 擬人法

・ 「ヒイーッヒイーッ」 = 「ひいひい」 = 激しく続々悲鳴や鳴

き声

㉒ 「ぶちこまれたら」

- ・ 「ぶちこむ」 = ほおりこむ、勢いよく中に入れる

㉓ 「山はもっと泣いた」

- ・ 擬人法

㉔ 「ブクブク」

- ・ 水中に深く沈んでいく様子

㉕ 「きいたことがない」

- ・ 語り手のユーモア

㉖ 「地ビタ」

- ・ 地べた、地面を俗っぽくいう言葉

㉗ 「おろしてけれえ」

- ・ おろしてくれえ

㉘ 「山は生まれてからまだいちども、人の肩にのったことはなかつたから」

- ・ ㉙の文の理由

- ・ 語り手のユーモア

(3) 本時の目標

三コは自分もオンチャであることを告げて励まし、オンチャのために、オイダラ山を海に放り込んで土地を増やそうとしたことが分かる。

根なし草

・仕事がないから一定の場所ではくらしていなければならない

三コは自分もオンチャであることを告げて励まし、オンチャのた

・あちこちで仕事をさがして漂つてくらすしかない

#### (4) 板書

おめえがた

オンチャのこと

人間のくず

- ・将来のこと、仕事のこと
- ・役に立たない者、とるに足りない者
- ・つまらない者

- ・自分たちを見下している

- ・うれしさ、感激

- ・自分の生まれを明らかにした励まし

- ・同胞、同類、仲間であること

- ・初めて姿を現した理由

- ・同じ仲間であることのうれしさ、親近

- ・感、頼もししさ

- ・三コもどうしたらよいかわからない

- ・くらしていける、生活していける

なんとすれば

くらし立つ

なんとしてもダメだア！

- ・強い言い切り

- ・仕事を百姓で考えている

土地をふやしてけるウ  
三尺も

ユサンユサン

三コはしょった、山を、  
オイダラ山を！

・約一メートル  
・ゆっくり大きくゆれる様子  
・背負う、背にのせる  
・倒置法、「しょった」を強調

・驚きを「！」

・ものすごい力、けたはずれな力

ヒイーッヒイーッて  
泣いた

・激しく続く悲鳴や泣き声

・擬人法

きいたことがない

人の肩にのったことは

なかつたから

・語り手のユーモア

「毛ズネ」とは何か。

(5) 発問

「三コよー、だアー」と伸ばしている〔ー〕のはなぜか。

(b) (a)

49

(c) 「おめえがた」を別の言葉で言い換えてみよう。

(d) 「オンチャたちのこと」とは何のことか。

(e) 「人間のくず」とはどんな人間のことか。また、オンチャたちは自分たちのことをなぜこんな言い方をするのか。

(f) オンチャたちはなぜ「ヤメレヤメレ」と言うのか。

(g) 「――」はオンチャたちのどんな気持ちを表しているか。

(h) 三〇はなぜオンチャたちに「おらも、もと、オンチャ」であることを言ったのか。また、このことから三〇が姿を現した理由を考えてみよう。

(i) 「アツハハハハハ」と笑うオンチャのどんな気持ちが想像できるか。

(j) 三〇がオンチャたちに「なんとすれば」と聞いていることから分かることは何か。

(k) 「くらし立つ」を別の言葉で言い換えてみよう。

(l) 「なんとしてもダメだア！」の「！」は、オンチャたちのどんな気持ちを表しているか。

(m) 「ンだども」を別の言葉で言い換えてみよう。

(n) 「冷や飯くい」とはどういう意味か。

(o) 「根なし草」とは、どういうことを表しているのか。

(p) 三〇が「土地をふやしてけるウ」と考えたのはなぜか。

(q) 「四股」とはどうすることか。

(r) オンチャたちはなぜ「アワ腹」なのか。

(s) 「三尺」とはどのくらいの長さか。

(t) 「ユサンユサン」とはどのような様子か。

(u) 「三〇はしょった、山を、オイダラ山を！」

(v) 「海はヒイーッヒイーッ」とはどんな泣き方か。

(w) 「ぶちこまれたら」を別の言葉で言い換えてみよう。

(x) 「ブクブク」とはどんな様子を表しているか。

(y) 「きいたことがない」とは、誰が言っているのか。また、この表現の仕方から語り手のどんな気持ちが分かるか。

(z) 「山は生まれてからまだいちども、人の肩にのったことはなかつたから」

① 誰が言っているのか。

② この表現の仕方から語り手のどんな気持ちが分かるか。

(3) これは山のどんなことの理由になつていいか。

(6) まとめの板書

第四場面

オンチャ

オンチャのこと  
もと、オンチャ

なんとすればくらし  
立つ

土地をふやしてけるウ  
ショッタ、山を、

オイダラ山を！

人間のくず  
ヤメレヤメレ

アッハハハハハ

なんとしてもダメだア！

根なし草

海 ←

↑ 三

コ

泣いた

ヒイーッヒイーッ

ひとの肩にのつた  
ことはなかつたから

もっと泣いた

(1) 教材文 《第五場面》

雲だけはわらつた。南のほうから流れてきて、オイダラ山のテツ

ベンにかかった雲だけはわらつた。雲は見聞がひろい。南へでも北へでもいくから。  
「タハハ、三」のばかケよ。」  
「バ、ばかケとはナ、なんだ！」

三」もオイダラ山をしおつてているから、あんまり「息」には、しゃべれない。  
「タハハ、ばかケだからばかケよ。山は山だ。海、ぶちこむばかケがあるか。ハゲ山のオイダラ山に木を植える。山しごとができるやオンチャがたも食えら。よそのオンチャがたは、そうして食つてら。」

雲はそういうと、ホカホカわらつて行つちまつた。  
「ンだンだ。」 オンチャがたは手をうつてよろこんだ。  
「そ、うか、そ、うだナ。」 三」も、ズシィーンと山をおろした。  
よろこんだのは山だ、オイダラ山だ。コロコロつてわらつた。

サア、それから三」はいそがしかつた。東へ走り、北へ走り、あっちの国からすこし、こっちの国からすこしづつ、ブナ・マツ・スギ・ヒバ・イタヤカエデなどをひんぬいてきた。

なぜって一べんにあんまりたくさんぬいてくれば、あつちのオン(18)  
チャがこまるからだ。

山はまたコロコロよろこんだ。(19)

なぜってハゲあたまに木を植えてもらひ、はだかのはだに衣を着(20)  
せてもらつたんだから——。

オンチャがたはさいしょ枝をはらつた。(21)  
そのつぎには大枝をおとした。(22)

それから幹をたおした。(23)

そのころはもうつぎの木がそだつていたから——。(24)

オノチャがたはさいや枝をはらつた。(25)

それから幹をたおした。

## (2) 教材解釈

① 「雲だけはわらつた」

・ 海や山は泣いた。それに対して雲だけは笑つた。対照的な描  
き方。擬人法

② 「雲だけはわらつた」

・ 繰り返して、「わらつた」ことの強調

③ 「見聞がひろい」

見聞=見たり聞いたりすること。また、そうして得た知識。  
見たり聞いたりして得た知識が豊富で、物知りである。

④ 「南へでも北へでもいくから」

③ 「見聞がひろい」の説明。倒置的表現

⑤ 「ばかヶ」

・ (からかいも含めて) ばかなやつ、ばか者

⑥ 「バ、ばかヶとはナ、なんだ!」

・ オンチャのためによかれと思ってやつてやつていることなのに、ば  
かなやつと言われ、怒つて問いただしている。

⑦ 「一息」

・ 一気に

・ ⑥「バ、ばかヶとはナ、なんだ!」の説明。読点一つで一息  
にしゃべれないのを表している。

⑧ 「山は山だ」

・ 山の特性を生かせ

⑨ 「オイダラ山に木を植える」

・ 場所と仕事の内容を教示

⑩ 「よそのオンチャがた」

・ ③「見聞がひろい」ことの例

⑪ 「ホカホカわらつて」

・温かさを感じさせる笑い

⑫「ンだんだ」

- ・ そだそうだ、なるほどなるほど

⑬「手をうつて」

- ・ 雲の教えてくれた名案に、オンチャたちは喜んで賛成の意を表した。

⑭「コロコロ」

- ・ 明るくて笑いころげる様子を表す言葉

・ オイダラ山がよろこんだのは、「海へぶちこまれずにすんだこと」と「ハゲ山に木を植えてもらえること」

⑮「東へ走り、北へ走り」

・ 東→岩手県、北→青森県

⑯「ブナ・マツ・スギ・ヒバ・イタヤカエデ」

・ ブナ=落葉高木、やや高い山地に生える

・ マツ=北半球の温帯を中心に約百種が分布

・ スキ=日本の特産

・ ヒバ=アスナロの別称

・ イタヤカエデ=山地に生ずる

木  
山地に適した

- ⑰「あっちのオンチャがこまる」
- ・ 岩手や青森のオンチャたちの生活をおびやかさないようによいう三コの思慮深さとやさしさ
- ⑲「またコロコロよろこんだ」
- ・ 木を植えてもらったこと
- ⑳「ハゲあたま」
- ・ 山頂

・ 擬人法、比喩法

㉑「はだかのはだに衣を着せて」

・ 木のはえでいい所に木を植えてもらつた

・ 擬人法、比喩法

㉒「さいしょは枝をはらった」

㉓「そのつぎには大枝をおとした」

㉔「それから幹をたおした」

〈順序〉      〈対象〉      〈処理〉

さいしょ——枝——はらった

そのつぎ——大枝——おとした

それから——幹——たおした

・ 「枝をはらった」=枝打=植林の下枝や枯れ木を切り落とす

㉕「——」

・「はらう」「おとす」「たおす」の連續性

(3) 本時の目標

山しごとができるればオンチャたちのくらしが立つことを見聞がひるい雲に教えてもらい、オイダラ山に木を植えて育てたことが分かる。

(4) 板書

雲だけはわらった

海や山——泣いた

- 見聞がひろい
- ばかケ
- バ、ばかケとは
- ナ、なんだ！
- 山は山だ

- 擬人法
- 物知り
- 倒置的表現

- ばかなやつ、ばか者
- オンチャのためにやっているのに
- 怒って問い合わせている
- 読点が二つ——一気に話せない
- 山の特性を生かせ
- 場所と仕事の内容を教えている
- 植えろ

ホカホカわらって

温かさを感じさせる笑い

ンだんだ

そうだそだ、なるほどなるほど

手をうつて

ようこんで賛成の気持ち

コロコロ

明るくてわらいころげる様子

北へ走り

海にぶちこまれずにすんだから

東へ走り

岩手県

北へ走り

青森県

あつちのオンチャが

こまる

守る

またコロコロ

岩手や青森のオンチャたちの生活を

ハゲあたま

三〇の考え方深さとやさしさ

木を植えてもらったこと

木を

山頂

擬人法、比ゆ法

はだかのはだに衣を

木のはえていない所に木を植えてもらいつたから

着せて

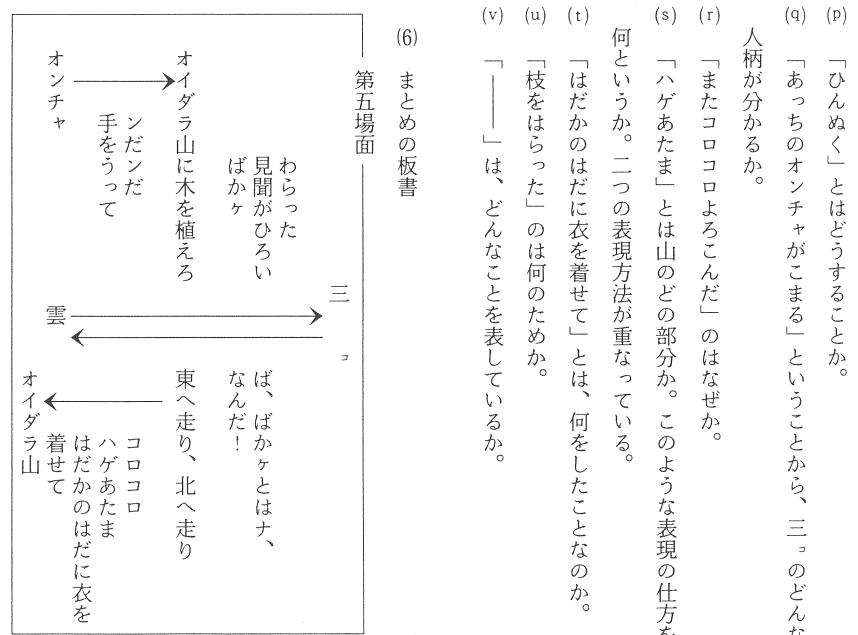
木を植えてもらつたこと

ハゲあたま

擬人法、比ゆ法

(a) 「雲だけはわらった」とあるが、雲以外はどうだったのか。また、このような表現の仕方を何と言ったか。

- (b) 「雲だけはわらった」が繰り返されているが何のためか。  
 「見聞がひろい」とは、どういうことを言うのか。
- (d) 「南へでも北へでもいくから」は何の説明をしているのか。前の文と一緒に考えるとこのような表現を倒置的表現と言う。
- (e) 「ばかケ」を別の言葉で言い換えてみよう。
- (f) 「バ、ばかケとはナ、なんだ！」と言う三つの気持ちを考えてみよう。
- (g) 「一息」を別の言葉で言い換えてみよう。また、一息でしゃべれないのは三つの会話文のどこで分かるか。
- (h) 「山は山だ」とは何を言おうとしているのか。
- (i) 「オイダラ山に木を植える」とは何を教えているのか。
- (j) 「よそのオンチャがた」とは、雲はどんなことの説明をしているか。
- (k) 「ホカホカわらって」とは、どんなことを感じさせるわらいか。
- (l) 「ンだンだ」を別の言葉で言い換えてみよう
- (m) 「手をうって」とは、オンチャたちのどんな気持ちを表しているか。
- (n) 「コロコロ」とはどんな様子のわらい方か。また、なぜよろこんだのか。
- (o) 「東へ走り、北へ走り」とあるが、東や北には何県があるか。



(1) 教材文 《第六場面》

三〇は、津軽とのさかいの、北の山脈に背中をのせて、山なりに  
ながながとねそべっていた。

北の夏の夜空は、たくさん星をちらりばめて、くらくおもく、ふ(4)  
とんのように、三〇をつづんでいた。三〇が、もじりとあたまをう  
ごかした。ゴトゴトと山がすこし鳴った。

ふもとの林の小鳥たちが、巣のなかで目をあき、そして、また  
ぶってねた。なかにはおくびょうなやつもいて、目の見えぬままに  
巣からすこしとびあがつたが、すぐ巣におちて、またねむった。

星だけがゼイタクに、しきりに光り、なかには尾をひいて流れる

のもあった。

三〇が、モゾリ(9)、とまたあたまをうごかした。そして大きな目玉  
を見ひらいた。満天の星が目にいittた。息をこらして、星を見つ  
めたまま身うごきもしない三〇のむねが、何やらやたらにさわぐの  
だ。

——キナくさい——！

三〇は、からだをおこして山にこしかけ、南の夜空をカツ(17)といら  
んだ。

——なにかが、もえている！

三〇は、突立(19)と、ドシドシ(20)と歩きだした。ボウボウ髪が星を  
はらいおとしそうに見えた。

むなさわぎはますますはげしくなり、なにやらキナくさいにおい  
も、ますますつよくなる。

けれども小鳥どもは巣にねむり、けものどもは林にねむっている  
のだから、キナくさいのは三〇の氣のせいかも知れない。

小鳥がさわぎ、鹿がおきあがるのは、あれは三〇の歩く地ひびき  
におどろいて目をさましただけなのだ。だから三〇がとおりすぎれ  
ば、すぐしづかになる。もし、ほんとうになにかがもえているのな  
らば、あの敏いものどもが、じっとねむっているわけはない。

けれども三〇のむねは、ますますさわぐ。  
三〇は、夜の山地をふみとどろかし、足をはやめて平野におりた。  
丘をまたぎ、米代川をザブザブ(29)とかちわたり、ちいさな部落など

は、ひとまたぎにして、南へ南へと足なみをのばした。  
③(31)

このあたりの鳥はねていても、けものはねていても、こんなにむ  
ねがさわぎ、こんなにせつなく、物のこげるにおいのするは、き  
つとなにか、三<sup>(32)</sup>のだいじなものが、もえているのにちがいないの  
だ。

(2) 教材解釈

- ①「北の山脈」  
・ 白神山地であろう。
- ②「山なり」  
・ 山のまま、山に従つて
- ③「星をちらりばめて」  
・ 星をきざみつけて
- ④「ふとんのように」  
・ 比喩法
- ⑤「つつんでいた」  
・ 擬人法
- ⑥「もじり」  
・ よじること、ねじること
- ⑦「日のみえぬま」  
・ 鳥目で夜は見えない
- ⑧「尾をひいて流れる」  
・ 後方に細長く伸びて流れる||流れ星
- ⑨「モゾリ」  
・ 少し、わずかに
- ⑩「満天」  
・ 大きく頭を動かせば、小鳥たちを起こしてしまっため、大き  
な頭を少し動かしたのである。
- ⑪「目にはいった」  
・ 自然に目に見える、目にとまる
- ⑫「息をこらして」  
・ 息をとめ、緊張している。
- ⑬「やたら」  
・ むやみ
- 「むやみやたら」＝「むやみ」を強める言葉。むちゃくちや

⑭ 「キナくさい」

・ こげくさい

・ 語り手の目から見ると→下から三〇を見上げると

⑯ 「むなさわぎ」

・ 布、紙、わたなど植物性の物が焦げるようなにおいがする。

⑰ 「―――！」

・ 何の焦げるにおいなのかをいろいろ思いめぐらしている。

⑯ 「南の夜空」

・ 三〇は今、秋田の最北の山地にいる。

⑰ 「カッと」

・ 急に大きく開く様子

⑯ 「なにかが」

・ 主に、目や口を大きく開く様子

⑯ 「なにかが」

・ キナくさくて何かが燃えているのは分かるが、何が燃えてい  
るのか分からない。

⑯ 「突っ立つ」

・ 勢いよく立ち上がる。

⑯ 「ドンドシ」

・ 重いものが地響きをたてて移動する連続音

・ 三〇は勢いよく立ち上がりとドンドシという地響きを立て  
ながら歩き始めた。

㉑ 「星をはらいおとしそうに見えた」

・ 足を強く踏んで、大きな音を響かせて

(28) 「足をはやめて」

- 早足で、

• 足をはやめて（歩いた）

• 北の山脈→山地→平野

(29) 「ザブザブ」

- かなりの量の水が大きく揺れ動いて波立つ連続音

(30) 「かちわたり」

- 徒歩で川を渡ること

(31) 足なみ

- 歩行の調子、歩行の足どり

• 「足を延ばす」=さらに遠くまで行く

(32) 「せつなく」

- 胸がしめつけられる思いでつらい

(33) 「こげる」

- 火に焼けて黒色[または茶色]になる

• 火に焼ける

(34) 「三」のだいじなもの」

- 伏線→「オイダラ山に木を植える」

(35) 「もえている」

- 前には「もし、ほんとうになにかがもえているのならば」と

仮定で表現されていた。

- ここでは「もえているのにちがいないのだ」と断定の表現になっている。

(3) 本時の目標

胸がこんなにさわぎ、こんなにせつななく物の焦げるにおいのするのは、だいじなもののがもえているのにちがいないと三〇は南へ南へと足なみをのばしたことが分かる。

(4) 板書

北の山脈

星をちりばめて

ふとんのよう

つつんでいた

もじり

モゾリ

満天

やたら

キナくさい

-----!

- いろいろ思いめぐらしている

・白神山地

・星をきざみつけて、擬人法

・比ゆ法

・擬人法

・よじること、ねじること

・少し、わずかに

・空一面

・むちゃくちゃ

・こげくさい

-----!

南の夜空

・秋田の最北の山地から

「もじり」とは頭をどうしたことか。

星をはらいおとしそう

・語り手の目、三ヶを見上げている

なぜ「田のみえぬまま」なのか。

むなさわぎ

・悪いことの予感で胸がどきどきする

「尾をひいてながれる」星を何と言うか。

ますますさわぐ

・三ヶと強い関係のある何か

「モゾリ」とは、頭をどうしたのか。

ふみとどろかし

・足を強く踏んで、大きな音を響かせて

「満天」を別の言葉で言い換えてみよう。

足をはやめて

・北の山脈→山地→平野

「目にはいった」とはどのような見方なのか。

かちわたり

・徒歩で川を渡ること

「息をこらして」とはどのような様子か。

せつなく

・胸がしめつけられる思いでつらい

「やたら」を別の言葉で言い換えてみよう。

三ヶのだいじなもの

・伏線「オイダラ山に木を植える」

「キナくさい」とはどんなにおいなのか。

もえている

・ちがいないと言い切っている

「――！」は何を表しているか。

(5) 発問

(a) 「津軽とのさかいの、北の山脈」とはどういか、地図でさがして

「南の夜空」とあるが、三ヶは今どこにいるのか。

みよう。

「カッ」とはどうな様子のことか。

(b) 「山なりになつて」とあるが、三ヶはどうのうにしてねそべつていたのか。

「突っ立つ」とはどうな立ち方か。

みよう。

「ドンドン」とはどんな物がどのようにして出す音か。

(c) 「星をはらいおとしそうにみえた」とは、誰の目からか。また、

そのように見えたのはなぜか。

「星をちりばめて」を別の言葉に言い換えてみよう。また、こ

のよくな表現の仕方を何と言ったか。

「ふとんのように」の表現方法を何と言ったか。

(d) 「つつんでいた」の表現方法を何と言ったか。

「ふみとどろかし」とは、どんな歩き方でどんな様子か。

(e) 「ふみとどろかし」とは、どんな歩き方でどんな様子か。

(y)

「足をはやめて」とあるが、三〇は今どこへ来たのか。  
「ザブザブ」というのはどんな様子の時の音か。

「かちわたり」とはどうすることか。  
「足なみ」を別の言葉で言い換えてみよう。

「せつなく」とはどんな気持ちなのか。

「三〇のだいじなもの」とは何か。

「もし、ほんとうになにかがもえているのならば」という前の書き方と「もえているのにちがないのだ」と比べてみよう。

(6)

### まとめの板書

#### 第六場面

三

○

北の山脈

キナくさい

むなさわぎ

ますますさわぐ

足をはやめて

三〇のだいじなもの

もえている

南の夜空

### (1) 教材文 《第七場面》

やがて三〇は遠く遠く、南の山のいただきが、ホースキほどに赤くなっているのを見た。

サテコソ！  
②

あれは、南秋田の郡、三〇のふるさとオイダラ村の見当にちがい

ない。いやいや、それどころか、あれはまぎれもなく、三〇が、オンチャたちのために木を植えたオイダラ山が、もえているのにちがいない。

③

④

⑤

⑥

⑦

⑧

⑨

⑩

⑪

⑫

⑬

⑭

⑮

⑯

ナムサン山火事！ 三〇は地をけって走りはじめた。

走るが走るが、三〇のむねには夜鳥のむれがパチパチとぶちあつた。

鳥どもは、火にネグラをうばわれて、やかましく鳴き立てながら夜空を黒い川になつて、ひつきりなしにゾウゾウと南から北へにげつづけた。

三〇の足にはパチパチと小石のようだけのもののからだがぶちあつた。鹿・熊・青じしどもは、火からすこしでも遠ざかるうと、ま

えをも見ず、<sup>(16)</sup> 目を皿ばしらせて、南から北へにげ走った。

天の鳥と、地のけものと、二つの川をむねと足にうけながら、

三コは風をまいて走りつけた。

走れ 走れ 走れ！ 三コ

オイダラ山が泣いている。あついといって泣いている。

オイダラ山とオンチャたちの泣き声が、心を引きさくように、は

つきりときこえた。

ジョヤサ、

ジョヤサ！

三コは走った、走った、走った。

ボウボウ髪はうしろに一束に、雲のようにふき流され、ムクの葉

をとじた着物は黒雲のよう舞いあがった。<sup>(22)</sup> 足音の地鳴りは、にげ

走るけものたちも一しゅんすくんで、こちらあたりまでなまあたたかくなつた地面にうづくまるほどであった。

このとき空はもうまっ赤で、ただれた空に、あぶりだされた星た

のとき空はもうまっ赤で、ただれた空に、あぶりだされた星た

強める

ちは、「死んだ魚の目玉」のように白かった。それを桃色に、ときには

金色に染めあげて炎のタテガミはうちなびいた。

オイダラ山は、もえさかる金のタキギになっていた。

## (2) 教材解説

① 「ホーグキほどに赤くなっている」

・ 形と色

・ ホーグキぐらいに→はるか遠方の距離だから

・ 「山のいただき」「ホーグキほどに赤く」→山火事

・ 比喩法

② 「サテコソ！」

・ やはり、思つた通り

③ 「郡」

・ 里・郷・町・村などを包括するもの

④ 「見当」

・ 見込み、予想

⑤ 「それどころか」

・ 多く下に否定の語を伴つて、とてもその程度ではない意味を

⑥「まぎれもなく」

- ・ まちがいない、明白である

⑦「もえているのにちがいない」

- ・ オイダラ山が燃えているのに違いないという悪夢のような確

信と断定

⑧「ナムサン」

- ・ 南無三宝の略。しまった、さあ大変

⑨「走りはじめた」

- ・ オイダラ山の山火事を確信して、ここから走り始める。「ナムサン山火事！」のあとに行を変えがしてないのは、すぐに走る

という行動を起こしたから

⑩「走るが走るが」

- ・ ものすごい速さで走りに走っていると

⑪「ぶちあたった」

- ・ 勢いよく当たる

・ 三」の走りに走る勢いと山火事に驚いて全速力で逃げる鳥↓

- ・ 「あたる」という程度ではなく「ぶちあたる」

⑫「黒い川」

- ・ 黒く暗闇の中だから黒く見える

- ・ 川→川の流れのようにとぎれることなく次から次へと

・ 比喩法

⑬「ゾウゾウ」

- ・ 続々と、あとからあとから

⑭「小石のように」

- ・ けものの体が「小石のように」だから、三」の体の大きさが

分かる。

・ 比喩法

⑮「青じし」

- ・ カモシカの異称

⑯「目を血ばしらせて」

- ・ 眼球が充血する

⑰「走れ 走れ 走れ！ 三」

・ 語り手の三」へのかけ声

- ・ 句読点がない↓間断なく、そして次第に強くなる

⑱「オイダラ山が泣いている。あついといって泣いている」

- ・ 速く行ってオイダラ山を救ってくれ、オンチャたちを助けてやれという語り手の必死の思いがこの言葉になっている。

- ・ 「泣いている」の繰り返し。オイダラ山が窮地に陥っていることの強調であり、その理由を「山火事」と言わず、語り手がオイダラ山に同調して「あついといって」と表している。

七五調→風雲急を告げる時。テンポの速い、リズミカルでまくしたてるような表現でないところの場面にそぐわない。

#### 擬人法

⑯ 「心を引きさくように、はつきりときこえた」

- ・ 「はつきり聞こえた」のは語り手と三ヶ所にある。
- ・ オイダラ山やオンチャたちの「泣き声」は容易ならざるものであり、語り手や三ヶ所の「心を引きさく」ほどのすさまじい絶叫であった。それが遠い距離にあっても「はつきりときこえた」のである。それは、オイダラ山やオンチャたちと関わりの深い者だけにはつきりときこえたのであり、身をそがれるような思いであり、いたたまれない思いの悪夢であった。

⑰ 「ジョヤサ、ジョヤサ、ジョヤサ！」三ヶ所は走った、走った、走っ

- ・ ジョヤサ（じょやさ）は曳山車を曳く時の掛け声。分かりやすく言うと他の祭りでの「ワッショイワッショイ」。その音の由来は「ジョ、イヤサカエ（序、弥栄え）」であると言われ、神事であることを垣間見ることができる。（土崎港祭り用語集）
- ・ 悪夢を見ているような思いで、まなじりを決し豪快に、それでいて死にもの狂いで走る三ヶ所。
- ・ 「ジョヤサ」「走った」では、三ヶ所の必死に豪快に、リズム

を伴った走りっぷりを表しており、それが句読点になっている。  
⑱ 「ボウボウ髪はうしろに一束に、雲のようにふき流され、ムクの葉をとした着物は黒雲のように舞いあがった」

- ・ ばあさん百姓が見たという三ヶ所の容姿が似ている。「ボウボウ髪」は同じ、「ブナの葉っぱをつづった着物」と「ムクの葉をつづった着物」は葉こそ違え葉っぱをつづった着物は同じである。ということは、ばあさん百姓は三ヶ所をしっかり見ていたことになる。

⑲ 「ボウボウ髪——一束に雲のように——ふき流され  
　　ムクの葉をとした着物——黒雲のように——舞いあがった  
　　三ヶ所の走りっぷりを容姿から比喩を使って表現

⑳ 「足音の地鳴り」

- ・ 「地鳴り」＝地震の前後または振動に伴う一種の音響
- ・ この地鳴りは、三ヶ所の豪快な走りっぷりからのものであり、それ故「足音」のことわざっている。
- ・ 「すくんで」
- ・ 「すくむ」＝（恐れなどのために）身がちぢんで動かない
- ・ 三ヶ所の走る足音の地鳴りのような音に恐れを抱いて体が動かなくなる。

㉑ 「ただれた空」

「ただれる」＝皮膚や肉がやぶれくずれる。また、比喩的に精神などが健全さを失うことにもいう。

第六場面の始めに、「北の夏の夜空は、たくさんの星をちりばめて、くらくおもく、ふとんのように三ヶをつついでいた。」

とある。このような正常な空が、山火事によってまっ赤になり、本来の空（たくさん星をちりばめ、くらくおもく）の働きを失ってしまっている。

(25) 「あぶりだされた星」

・ 「あぶる」＝火で焼く

・ オイダラ山の火で焼け出された星たちは

(26) 「死んだ魚の目玉のように」

・ 比喩法

(27) 「染めあげて」

・ 「染め上げる」＝染めてその色にしあげる

・ 山火事の火が星たちを桃色や金色にしたこと

(28) 「炎のタテガミはうちなびいた」

・ 「タテガミ」＝馬・獅子などの首の後ろの部分から肩の近くまで生えている長い毛

・ 「うちなびく」＝草木、髪などがさっと横に伏せる

・ タテガミのような長い炎がさっと横に伏せる。比喩法

(29) 「もえさかる金のタキギ」

・ 「もえさかる」＝さかんにもえる

・ オイダラ山は、盛んにもえる金色をしたタキギのようになつていた。比喩法

(3) 本時の目標

南をめざしていた三ヶは、オイダラ山が火事であることを知り、風をまいて走り続けたが、オイダラ山は金のタキギになつていたことが分かる。

(4) 板書

ホーッキほどに赤く

・ 形と色

・ 山火事

・ 比喩法

サテコソ  
・ やはり、思った通り

見当  
・ 見込み、予想

まぎれもなく  
・ まちがいなく

もえているのにちがい  
ない  
・ もえているのは確実だ

・ 悪夢のような思い

・ しまった、さあ大変

ナムサン

走りはじめた

- 今まで「足をはやめて」

擬人法

- ここで走りはじめる

心を引きさくように

- すさまじい絶叫の声

走るが走るが

- ものすごい早さで走りに走って

はっきりときこえた

黒い川

- 黒→暗やみの中だから鳥が黒く見える

ヤたちとの関わりの深さ

ゾウゾウ

- 必死に豪快に、リズムを伴った走りつ

小石のように

- ワッショイ

走った

- ぶり→句読点

青じし

- 空の働きをなくした空

走れ 走れ 走れ！

- 山火事で焼け出された星たち

三コ

- タテガミのよう

オイダラ山が泣いて

- 炎のタテガミは

いる  
あついといって泣いて

- 死んだ魚の目玉のように

- 語り手の三コへのかけ声
- 句読点がない→とぎれることなく、次
- 第に強くなる
- 語り手の必死の呼びかけ
- 速く行って助けてやれ
- 「泣いている」の繰り返し→オイダラ山が窮地に陥っていることの強調

- まくしたてるような表現
- 七五調→テンポが速く、リズミカルで

- (a) 「ホーッキほどに赤くなっている」とから分ることは何か。

(5) 発問

もえさかる金のタキギ

- 盛んにもえる金色をしたタキギのよう

になっていた

- 比ゆ法

(b) 「サテコソ」を別の言葉で言い換えてみよう。

(c) 「見当」を別の言葉で言い換えてみよう。

(d) 「もえているのにちがいない」と「もえている」と比べてみよう。

(e) 「もえているの三〇の気持ちを想像してみよう。

(f) 「ナムサン」を別の言葉で言い換えてみよう。

(g) 「走りはじめた」とあるが、三〇はここまでどうして来たのか。

(h) 「走るが走るが」とはどのような走り方か。

(i) 「黒い川」とはどのような様子のことか。また、このような表現の仕方を何と言ったか。

(j) 「ゾウゾウ」を別の言葉で言い換えてみよう。

(k) 「小石のように」から三〇のどんなことが分かるか。また、このような表現の仕方を何と言ったか。

(l) 「青じし」とはどんな動物か。

(m) 「走れ 走れ 走れ！」

(n) ① 誰が言っているのか。

② 句読点がないのはなぜか。

③ 声に出して読むとすると、どのような読み方がよいのか。

「オイダラ山が泣いている。あついといって泣いている」

① 語り手は三〇に何をしてほしいと思っているのか。

(b) 「泣いている」が繰り返されているのはなぜか。

(c) 「山火事」と言わず「あついといって」と表現しているのは、

語り手のどんな気持ちを想像できるか。

(d) 七五調にしてるのは、どんな効果をねらっているのか。

(e) このような表現の仕方を何と言ったか。

(f) 「心を引きさくように、はつきりときこえた」

(g) ① 誰に「きこえた」のか。

(h) ② その「泣き声」はどのようであったか想像してみよう。

(i) ③ 三〇や語り手になぜ「きこえた」のか。

(j) ④ 「きこえた」時の三〇や語り手の気持ちを想像してみよう。

(k) 「ジョヤサ、ジョヤサ、ジョヤサ！」三〇は走った、走った、走った

(l) ① 「ジョヤサ」はかけ声であり、祭りでいうと「ワッショイ」に当たる。

(m) ② 「ジョヤサ」「走った」から、三〇のどんな走り方が想像できるか。句読点があることもヒントにしてみよう。

(n) 「ボウボウ髪はうしろに一束に、雲のようにふき流され、ムクの葉をとした着物は黒雲のように舞いあがった」

① 三〇の何を表した表現か。

② 「雲のように」「黒雲のように」などの表現の仕方を何と言つ

たか。

③ 第一場面でばあさん百姓が見たという三コの姿と比べてみよう。そのことから、ばあさん百姓は本当に三コを見たのかどうか判断してみよう。

「ただれた空」とはどんな空か想像してみよう。

「あぶりだされた星」とは、星がどのようになつたのか。

「死んだ魚の目玉のように」という表現の仕方を何と言つたか。

「炎のタテガミ」のような表現の仕方を何と言つたか。

「うちなびく」とはどうになることか。

「もえさかる金のタキギ」

① 「もえさかる」を別の言葉で言い換えてみよう。

② このような表現の仕方を何と言つたか。

(v) (u) (t) (s) (r)

(6) まとめの板書

## 第七場面

三コ (語り手)

ホーッキほどに赤く

サテコソ

まぎれもなく

もえているのにちがいない

ナムサン

走りはじめた

(走れ 走れ！三コ)  
(オイダラ山が泣いている)

(あついといって泣いている)

心を引きさくように

はつきりときこえた

ジョヤサ、ジョヤサ、ジョヤサ！

走った、走った、走った

炎のタテガミ  
うちなびいた  
もえさかる金のタキギ

オイダラ山

## (1) 教材文 《第八場面》

①

おそかつたのだ。もうまにあわない。三コが北から東から、引きぬきひんぬいてきて植えた、マツ・スギ・ヒバ・イタヤカエデは、

〔2〕  
「一团」のタキギとなつて、えんえんともえさかつていた。

三コはぼうぜんと突つ立つたまま、オイダラ山をにらみつけて、  
ボロボロとなみだをこぼしていった。

〔3〕「か三コか、おそかつた！」

オンチャたちも泣いていた。ひざをつかみ、まだあつい地面にぶ  
つたおれ、オンオンと泣いていた。

〔4〕「三コ、すまねえ、おまえにもらった山の木、焼いちまつた！」

〔5〕「なーんもだア。山の木は、植えればまたはえらア。それに見る、  
あっちの森こっちの山、木はまだズッパリはえてらア。げんきをお  
とすな！」ダメダと思ったときがダメなんだぞウ！」

〔6〕三コはこのとき

ヒーツ

〔7〕というオイダラ山の身をよじるようなさけびをきいた。  
〔8〕見ると、金色にもえただれたオイダラ山のてっぺんが、すこしく  
〔9〕ずれて、ふもとへ金のタキギがもえおちた。

〔10〕金の竜のようなそいつが、ややはなれたふもとの黒い森へ頭を突  
〔11〕つこむと、森はしづかにブスブスとふすぶりはじめた。

〔20〕「オイノ森、火がついたぞ！」

〔21〕オンチャたちの、そっちに近い何十人かがトビ口・ナタ・マサカ  
〔22〕リを持ってオイノ森へ走つていった。木をきりたおして、もえひろ  
〔23〕がるのをふせごうというのだ。

〔24〕「ああだめだ、また上から火がくずれるぞ！」

指さす一人のオンチャの指の先では、遠くオイダラ山のてっぺん  
の火が、またあやうくくずれそうに煮えたぎっていた。

〔25〕「こうしてくずれて、つきつぎあちこちに火の滝が降つてきたら、  
もうどうにも手がつけられねえ。山火事は、北の北までもえてくぞ！」

〔26〕秋田の国じゅう火の海だア-----。

〔27〕かおじゅう涙とススでベチョベチョによごして、じいさま百姓が  
〔28〕そううめいた。

## (2) 教材解釈

① 「おそかつたのだ。もうまにあわない。」

- ・ 三コの思いでもあり、語り手の思いでもある。

- ・ 短文で断定的なのは、絶望的な状況を表している。

②「一団」

- ・ ひとかたまり、一群

③「えんえん」

- ・ 火がさかんに燃え上がる様子

④「ぼうぜん突つ立つたまま」

- ・ 駆けつけたもののもう手遅れでなすすべもなく、ぼんやりとして何もしないでただ立っている様子

⑤「なみだをこぼして」

- ・ オンチャたちが大切に育ててきたものが今燃えてなくなろうとしていることへの悲しみ

・ オンチャたちの生活の糧が灰になることの無念さ

- ・ 三コは自分の労力が無駄になったとして、なみだをこぼしているのではない。

⑥「おそかった！」

- ・ こんな時はきっと三コが助けに来てくれるに似た思いで、オンチャたちは待ち焦がれていたのであるう。

⑦「オンオン」

- ・ 声をあげて泣く様子

- ・ オンチャたちの絶望的な悲しみ、為すすべもない状況に、た

- ・ だもう泣くことしかなかつた。

⑧「燒いちまつた！」

- ・ 血を吐くような思いのオンチャの謝罪の言葉

- ・ この山火事の原因は触れられていないが、「焼いちまつた！」を言葉通りに受け取れば、オンチャたちの火の不始末と考えられる。しかし、季節が「夏」であるから、自然発生的な山火事とも考えられる。

- ・ いずれにしても「焼いちまつた！」は、消火をすることが出来なかつたこと、結果的には自分たちの責任であることを言つてゐる。

⑨「なーんもだア」

- ・ どういうことが原因であるにしろ

⑩「ズッパリ」

- ・ たくさん、ぎょうさん

⑪「げんきをおとすな！」

⑫「ダメなんだぞウ！」

- ・ 共に、声を大にして力をこめて、オンチャたちを励ます言葉

⑬「ヒーッ」

- ・ 悲鳴

⑭「身をよじるようなさけび」

・ 热さに耐えかねて、身もだえ（体をうねらせる）するような

さけび

・ だんまつま（息を引き取るまぎわの苦痛）のさけび

・ 比喩法

⑯ 「金色にもえただれたオイダラ山のてっぺん」

・ 第七場面に「南の山のいただきが、ホーゼキほどに赤く」と

ある。山火事は、オイダラ山の頂上あたりから始まつたと推測

できる。

⑯ 「金の竜のようなそいつ」

・ 「そいつ」→金のタキギ

・ 燃え落ちる金のタキギが、さも金色に輝く竜のように、上から麓へと動いているように見える。

・ 比喩法

⑰ 「頭を突っこむ」

・ 「頭」=金の竜の頭=燃え落ちた金のタキギ

・ 擬人法

⑱ 「ブスブス」

・ 炎をあげずに煙だけ出して燃える音や様子

⑲ 「ふすぶり」

・ 火がよく燃えないで煙が立つ

⑳ 「オイノ森」

・ やや離れた麓の森

㉑ 「トビ口」

・ 棒の端にトビのくちばしのような鉄製のかぎをつけた物。消防士や人足が物を引っかけて運んだり壊したりするのに用いる道具。

㉒ 「ナタ」

・ 短く厚く、幅の広い刃物。薪などを割るのに用いる。

㉓ 「マサカリ」

・ 斧に似た大形の道具。主に木を伐るのに用いる。

㉔ 「あやうく」

・ 危険である、あぶなく

㉕ 「煮えたぎって」

・ 煮えて沸とうする、煮えくりかえる

㉖ 「火の滝」

・ 火が滝のように

・ 比喩法

㉗ 「手がつけられねえ」

・ 施すべき手段・方法がない

㉘ 「火の海だア」

・ 火が海のように

・ 比喩法

(29) 「-----」

- ・ もう絶望だ、もうおしまいだ、何ともならない

(30) 「べちょべちょ」

- ・ 「べとべと」 = 物がねばりつく様子

(31) 「うめいた」

- ・ 低い声を出す、うなる

(3) 本時の目標

オイダラ山はえんえんともえさかり、てっぺんから火がくずれ出  
すまでとなり、どうにも手がつけられなくなっていたことが分か  
る。

(4) 板書

おそかつた  
もうまにあわない

・ ひとかたまり  
・ 火がさかんにもえる様子

えんえん

ぼうぜんと突っ立った  
かけつけたもののもう手遅れで何も手  
なみだをこぼして

・ 大切に育ててきたものが無になる  
・ オンチャたちの仕事がなくなる  
・ オンチャたちの生活ができなくなる  
・ 三ヶが助けに来てくれるという期待  
・ 待ちこがれていた  
・ 持ち

おそかつた！  
焼いちまつた！  
火事を出してしまったことをわびる気

げんきをおとすな！  
ダメなんだぞウ！  
身をよじるような  
さけび  
金の竜のようなそいつ  
煮えたぎって  
火の滝  
手がつけられねえ  
火の海  
うめいた

・ 声を大にして力をこめて

・ 励ましの言葉

・ 熱さにがまんしきれずに

・ 体をうねらせるようなさけび

・ 金のタキギ

・ 煮えてふっとうする

・ 火が滝のよう

・ やるべきことや方法がない

・ 火が海のよう

・ 低い声でうなる

(5) 発問

- (a) 「おそかっただのだ。もうまにあわない」とは、誰の思いか。また、短文で言い切っているのは、どんな気持ちを表しているか。
- (b) 「一团」を別の言葉で言い換えてみよう。
- (c) 「えんえん」とはどんな様子か。
- (d) 三〇が「ぼうぜんと突つ立つたまま」なのはなぜか。
- (e) 「なみだをこぼして」いる三〇はどんな気持ちなのか。
- (f) 「おそかっただ!」というオンチャはどんな気持ちから言っているのか。
- (g) 「オンオン」とはどんな泣き方か。
- (h) 「焼いちまつた!」とはオンチャのどんな気持ちからの言葉か。
- (i) 「なーんもだア」を別の言葉で言い換えてみよう。
- (j) 「ズッパリ」を別の言葉で言い換えてみよう。
- (k) 「げんきをおとすな!」「ダメなんだぞウ!」は何のために、どのような言い方をしているか。
- (l) 「ヒーッ」はどんな時の声か。また、このような表現の仕方を何と言うか。
- (m) 「身をよじるようなさけび」とはどのような叫びなのか。また、このような表現の仕方を何と言うか。
- (n) 「金色にもえただれたオイダラ山のてっぺん」とよく似た表現

が第七場面にある。さがしてみよう。

- (o) 「金の龍のようなそいつ」の「そいつ」とは何か。また、このような表現の仕方を何と言うか。
- (p) 「ブスブス」とはどんな燃え方か。
- (q) 「オイノ森」を説明している文をさがしてみよう。
- (r) 「トビロ」「ナタ」「マサカリ」というのは、どのような道具か。
- (s) 「あやうく」を別の言葉で言い換えてみよう。
- (t) 「煮えたぎって」とは、どのような様子か。
- (u) 「火の滝」とはどのような様子のことを言うのか。また、このような表現の仕方を何と言うか。
- (v) 「手がつけられねえ」を別の言葉で言い換えてみよう。
- (w) 「火の海だア」とはどのような様子のことを言うのか。また、このような表現の仕方を何と言うか。
- (x) 「―――」には、どんな気持ちが考えられるか。
- (y) 「べちょべちょ」とはどんな様子のことか。
- (z) 「うめいた」とはどんな様子のことか。

(6) まとめの板書

第八場面

三コ・(オンチャ)

おそかつた

もうまにあわない

ぼうぜんと突つ立つた

なみだをこぼして

(おそかつた!)

(焼いちまつた!)

げんきをおとすな!

ダメなんだぞウ!

かぶさった。

三コのむねの下でグザグザと、白金のオキがくずれた。パツと火の粉の柱が空に舞いあがった。

けれども、三コはからだをはなしはしなかった。三コはますます固く、オイダラ山をだきすべくめた。

ブスブスと、肉の煮えただれるにおいがした。三コのボウボウ髪に火がついた。ムクの葉をつづった着物にも火がついて、着物はいちど金色にかがやき、はなれたムクの葉がムク鳥のように舞つたが

(1) 教材文 《第九場面》

「ナーニ、そん<sup>タ</sup>こと、させてたまるかア！」

三コはさけんでみんなのほうをむいた。もういちどオンチャたちをジツとよく見た。そしてニコッとわらつた。

「いいかア、火がきえたら、焼けあとには木を植えるんだぞウ。ハ|<sup>⑦</sup>  
ハツハツ、焼け山の土はよく肥えて、木はスンシンなんばでも伸びらア！みんな。オンチャがた。<sup>⑧</sup>マメでくらせエ！」

三コは言いおわると、オイダラ山にむきなおって、オイダラ山に

かぶさった。

三コのむねの下でグザグザと、白金のオキがくずれた。パツと火<sup>⑫</sup>

の粉の柱が空に舞いあがつた。

けれども、三コはからだをはなしはしなかった。三コはますます固く、オイダラ山をだきすべくめた。

ブスブスと、肉の煮えただれるにおいがした。三コのボウボウ髪

オイダラ山

身をよじるような  
さけび  
金の龍のようない  
そいつ  
火の滝  
火の海

(手がつけられねえ)  
(うめいた)

(15) やがてそれもしずまつた。

(16) 空はやや暗くなり、星がみずみずしくかがやきはじめた。

(17) 百姓がたは、みんな膝をついて、オイダラ山へむかって、三コへ

(18) むかって、両手を固くにぎってあわせていた。

(19) だれも声はせず、ことばもしゃべれず、顔をピタビタによじして

いた。

(20) オイダラ山からはふすぼるけむりが立ちのぼり、立ちのぼり、三

コのからだは見えなくなつて、星だけが暗い夜空にあらいだしたよ

うにかがやいていた。

## (2) 教材解釈

### ① 「そんゝこと」

- ・ そんなこと

- ・ 「そんゝこと」=秋田の国じゅう火の海
- ・ 「ゝ」がカタカナ→強調

### ② 「させてたまるかア！」

- ・ 強い決意で火の海にしないための方法を実行しようとしてい

た。方法とは、自分の体で火を消すこと。それ以外の方法はなかつた。

③ 「みんなのほうをむいた」

・ 炎に照らされて赤く染まる三コは「王立ち

④ 「ジッとよく見た」

・ いつもしむまなざしで

⑤ 「ニコッとわらった」

・ 励ましといたわりをこめた笑い

・ オンチャたちにとって、この上なく頼りがいのある姿であり、

守護神として映つたであろう。

・ ただし、オンチャたちは、三コが何をしようとしているかを

おしはかるとはできない。そんな余裕もない。

⑥ 「焼けあとには木を植えるんだぞウ」

・ 自分の死後の適切な指示

⑦ 「ハツハツハツ」

・ 悲壯な極限状況の中での三コの笑い。しかし、三コには悲愴感がない。この火を消すにはこの身をもつてするほかない。そのため、こんな大きな体になつたのだと考えたのだろう。

・ それは、数多くの仲間たちのために、命を捨てても火と戦う

道を行くことに、本当の幸せがあるという境地にまで三〇が達していたことを物語る。第一場面のはじめに「からだがそだつたのは、魂がそだつたらどう」とあるがそれに該当する。

(8) 「みんな」

- ・ 山火事の消火に当たっていたのは、オンチャたちだけではない。第七場面の最後に「じいさま百姓が、そううめいた」とあり、第八場面後半に「百姓がたは」とある。
- ・ オンチャ以外の人たちにもきちんととした別れの挨拶をしていることになる。

(9) 「マメでくらせエ！」

・ 「マメ」＝体がじょうぶな様子

- ・ 最後の最後まで、みんなやオンチャたちに気を配り、いたわり、元気づける三〇の言葉

(10) 「オイダラ山にむきなおって」

- ・ 今まで、みんなやオンチャたちの方を向いて話していたが、オイダラ山に正対（対象にまっすぐ向くこと、まともに向き合うこと）した

(11) 「白金のオキ」

- ・ 「白金」＝灰白色を帯び、あざやかな光沢をもつ貴金属。ブ

ラチナ

・ 「オキ」＝薪が燃えて炭のようになったもの

・ 比喩法

(12) 「火の粉の柱」

・ 比喩法

(13) 「だきすくめた」

- ・ 抱きしめて身動きできないようにした。

- ・ オイダラ山と三〇の体の間に空間ができれば、火はまた燃え上がる。空気が入り込まないようにして消火に当たっている。

(14) 「ムク鳥のよう」

・ 比喩法

(15) 「しずまつた」

- ・ ムク鳥のよう舞ったムクの葉も落とした。

(16) 「空はやや暗くなり」

- ・ まっ赤だった空が「やや暗く」なったことから、下火になつたことを表している。

(17) 「みずみずしく」

- ・ 光沢があつて生氣に満ちている、新鮮で美しい

(18) 「両手を固くにぎってあわせていた。だれも声はせず、ことばもしゃべれず、顔をビタビタによごして」

- ・ 自らを犠牲にして山火事を消してくれた三〇は、神や仏のよ

うな存在であり、そんな三〇への弔いである。

- ・自分たちのために身を投げ出した壮烈な行為に感動と深い感

謝の念から

(19) 「ふすぼる」

- ・よく燃えないで煙が立つ。

・山火事が鎮火しかかっている。

(20) 「あらいだした」

- ・洗い落として元の姿を現す。

(3) 本時の目標

みんなやオンチャたちを励まし、三〇は三〇にしかできない身を

犠牲にしてという方法で山火事を消したことが分かる。

(4) 板書

そんゝこと

させてたまるかア

・秋田の国じゅう火の海

ジッとよく見た

ニコッとわらった

マメでくらせゅ！

- ・最後の別れ
- ・励ましといったわり
- ・気を配り、元気つける

・守護神のように

白金のオキ

火の粉の柱

だきすぐめた

ムク鳥のように

両手を固くにぎって

声ははず

ことばもしゃべれず

顔をビタビタによごして

ふすぼる

・山火事が鎮火しかかっている

(5) 発問

(a) 「そんゝこと」とはどんなことか。

(b) 「させてたまるかア！」から三〇のどんな気持ちが分かるか。

(c) 「みんなのほうをむいた」三〇は、オンチャたちにはどのよう

に見えたか想像してみよう。

(d) 「ジッとよく見た」「ニコッとわらった」三〇は、どんな気持

ちだったのか。また、オンチャたちはそんな三〇が何をするのか

分かっていたのか。

・比ゆ法

・比ゆ法

・火がもえ上がらないように

・火がもえ上がり

・感動と深い感謝

・三〇への弔い

・感動と深い感謝

・山火事が鎮火しかかっている

(e) 死に臨んで「ハッハッハッ」と笑える三〇には、どんな思いがあつたのか。それは第一場面のどの文と関係があるのか。

(f) 「みんな」と呼びかけているが、現場にいたのはオンチャたちだけではなかつたのか。

(g) 「マメでくらせエ！」は、みんなやオンチャたちへのどんな言葉だったのか。

(h) 「白金のオキ」とはどのような物か。また、このような表現の仕方を何と言つたか。

「火の粉の柱」のような表現の仕方を何と言つたか。

(i) 「だきすくめた」とあるが、なぜこのようなことをしたのか。

「ムク鳥のように」のような表現の仕方を何と言つたか。

(l) 「みずみずしく」とはどのような様子になつたのか。

(m) 「両手を固くにぎってあわせていた。だれも声はです、ことばもしゃべれず、顔をビタビタによごして」とあるが、みんなやオンラインチャたちはどんな思いでいたのか。

(n) 「ふすぼる」とはどんな様子か。また、それは山火事がどうなつたことか。

(o) 「あらいだした」とあるが、星はどのようになつたのか。

## (6) まとめの板書

### 第九場面

三

〇

そんタ こと

させてたまるか ア

ニコッとわらつた

マメでくらせ エ！

だきすくめた

両手を固くにぎって

声はです

ことばもしやべれず

顔をビタビタにして

みんな・オンチャ

### (1) 教材文 《第十場面》

①

それから何年も何年もたつて、秋田は木の国になつた。秋田の山はどこへいっても昔のオイダラ山みたいなハゲ山はなくなつた。

みんな三〇が植えてまもつた木のカブをわけて、オンチャがたが

山しごとをするようになつたから――。

②

三〇は、死んだ。そのあと三〇を見たものはもうだれもいない。

(3) 三〇はもういないか？いいや、三〇は、いる。三〇みたいなオ

ンチャたちがうんとそだつた。

(4)

ンチャたちがうんとそだつた。

いまでもオンチャがたのくらしがこまるとい、三〇みたいに考える

やつだの、山を海にブチこもうとするやつだの、東や北から木を集めてくるやつだのがでてくるからな――。

## (2) 教材解釈

①「木の国になった」

- ・ オンチャたちが三〇の遺志を受け継いだ。

②「――」

- ・ 「秋田は木の国になった」「ハゲ山はなくなつた」

③「三〇はもういないか？いいや、三〇は、いる」

- ・ 反語＝断定を強めるために、言いたい意の肯定と否定とを反対にし、かつ疑問の形にした表現

- ・ 「三〇は、いる」の読点も「いる」ことを強調

④「うんとそだつた」

- ・ 三〇の偉業とその行為は、オンチャたちの中で長く語り継が

れてきたことを物語る。また、三〇の言動をまねることは、オンラインチャたちにとって三〇はあこがれの存在なのであった。

(5) 「――」

- ・やはり、三〇はいる。心の中に三〇は生き続けている。

## (3) 本時の目標

三〇のことは長く語り継がれ、三〇をまねるオンチャがうんと育つたことが分かる。

## (4) 板書

木の国になった

- ・三〇の志を受け継いだオンチャたち
- ・三〇はもういないか？
- ・反語

いいや、三〇は、いる

- ・「いる」ことを強調
- ・「――」
- ・長く語り継がれてきた

うんとそだつた

- ・三〇が心の中に深く根づく
- ・あこがれの存在

## (5) 発問

(a) 「木の国」になったのはなぜか。

- ・「――」にはどんな言葉が入るか。

(c) 「三」はもういないか？いいや、三は、いる。」という表現の仕方を反語と言う。強く言い切るために、「いる」とこと

「いないこと」の順序を逆にして、疑問の形にしたもの。

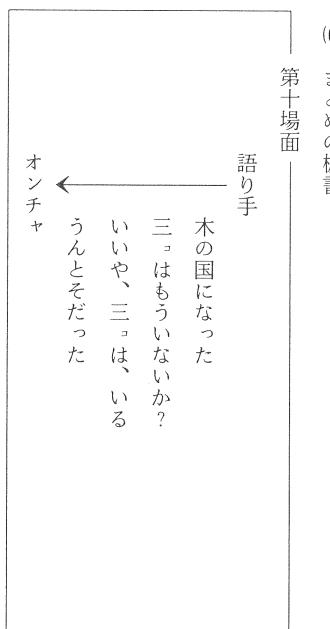
(d) 「三」は、いる」と「三は、いる」を比べてみよう。

(e) 「うんとそだつた」のはどういうことから分かるか。また、それはどんなことから分かるか。

(f) 「——」にはどんな言葉が入るか。

#### 参考文献

- (1) 「三」 斎藤隆介・作 福音館書店 一九六九年刊行
- (2) 「モチモチの木」 斎藤隆介・作 理論社 二〇〇五年刊行
- (3) 「国語大辞典」 金田一春彦ほか 小学館 一九八二年刊行
- (4) 「広辞苑」 新村 出編 岩波書店 一九七七年刊行



おわりに

「はじめに」のところで、私が授業で意図したことのうち「(r)とばや表現の仕方に目を向けさせる」とことと「想像する(イメージ化)